
月夜話

京夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜話

【Nコード】

N6927R

【作者名】

京夜

【あらすじ】

長女「更紗」は霊と話し、抜うこともできるが少しおとぼけ。次女「萌葱」は可愛い顔立ちなのに武道が得意。三女「舞姫」は小さいのに一家の家事をまとめるしっかり者。都心から少し離れた港町に住む美人三姉妹がおこす、日々のちょっとした不思議な出来事を一話ごとにつづります。

其之壱 「孫」

この街は二つほどの特色を持っている。

一つには、温泉が出るためにちよつとした観光設備が整っていること。そしてもう一つは、恐山のように靈的存在が強く、お祓いが非常に盛んであると言う……。

神無月更紗カンナツキサラサの名を持つ22才の娘は、そんな変わった街の中でも靈的な方面でちよつとした有名人であつた。普段はちよつとおとぼけている感じのする娘だが、日本で最も高い請求額を提示し、しかも受けた依頼はすべて解決させていると言う実績がある。

こういつたタイプの人物はおおかた高慢な態度と気性を持ち併せているが、彼女の場合はやや事情が異なっていた。

代々この家業を継いできた者への遺産と親からの仕送りで充分にやっていけるため、彼女は依頼の数を「少なく」しようとお金を釣り上げたのだが、思うとおりの件数にするためには日本最高額まで値を釣り上げねばならなかっただけであり、実際の彼女はむしろごく一般的な22才の娘であつた。

こうして彼女の望み通り一月に一件という依頼の少なさになると、街の人達に公園のように扱われている庭の最も大きな櫓ケヤキの下で、讀書をしたり訪れた人と会話を交わすのが、彼女の生活のほとんどとなつた。同じ家に住む残りの二人の妹から、「養つてもらっているのか、養っているのか解らない」などと皮肉られるほど、彼女はのんびりと暮らしているのだった。

今日も夕暮れ近くなつて蝸ヒケラシが、かな　かな　かな……　と寂しい声で鳴くなか、更紗は史記をゆつくりと読んでいた。幸せそうなカップルが二組と家族が一組ほど通り過ぎただけの、今日は静かな夕暮れだった。

台所では末妹の舞姫マイヒメが、足りない身長を補うために、脚立に乗り

ながら料理を作っていると、まん中のいちばん活発な萌葱^{モウキ}が帰ってきたのも、だいたいその頃だった。

末妹の舞姫は、いまだ小学生ながら家事の全般を担っているしっかり者で、残り二人の姉もこの妹には頭が上がりないところがある。体つきこそまだ幼いが、「舞姫」の名の示すとおり非常に優雅な容姿を持っている。その反面、性格はややきついところもあった。

二人に挟まれた高校生の萌葱は、高い身長のわりにずいぶんと細身で、ちよつと見た目には非常にか弱く見えるのだが、意外なことに彼女は武道全般に秀でていて、特に長刀^{ナギナタ}は全国クラスの腕前を持っている。まるで男の子みたいに短く切った髪と、それと対象的な女らしい細すぎる体と眩しいほどの笑顔が街でも人気で、買い物に行くとかかなり安値で売ってくれる親父さんが多い。クラブの帰りに萌葱は夕食の買い物をしてきては、舞姫に手渡すのが毎日の日課となっていた。

「ただいま！ ハイ、頼まれていた物」

「お帰りなさい……そこに置いといてくれる？」

お気に入りの黒い脚立の上にちよこんと座り、舞姫はジャガイモの皮をなれた手つきで剥いていたが、ふいにその手を止めると、庭を眺めることの出来る窓を一瞥^{イチベツ}した。

「更紗にお客様ね。萌葱、お茶を出してやって」

萌葱は持っていた荷物を放り出し、冷蔵庫の中の冷たい麦茶を飲んでいた。

「お客様……？」

「ええ、ずいぶん変わった方がいらしたわね」

舞姫は何かを考えるように、包丁を振り回していた。

土の感触、夕暮れ、涼しい風、力強い樹木。

そんな物を初めて見たかのようにだった。

数歩進み、そして、更紗の横に立つ。

それでも、しばらく呆然としていた。

更紗はその様子を見て、この老人に好感を持った。

白髪だが、いまだ精力みなぎる風貌を持つこの老人は、この漁村を最近はやりの観光地に作り上げた第一人者で、この街一番の名士であつた。市長でさえ頭の上からない存在で、物心ついた年頃になれば彼の存在ぐらいは知っているのが普通であつた。だが更紗はこの街の自然を構わずに破壊していく様子をあまり好んでいない者の一人だつたので、この老人に対してはあまり好感を寄せる気持ちにはなれなかつた。

だが会つて話をするまでは……つまり噂だけで人を見るのは良くないことだと教えられていたので、その印象は控えていたのだが、会つてみればこんな単純な自然に感動してしまうたんなる一老人ではないか、と思つたのだつた。

気づいてみると、こんど老人は更紗をじつと見つめていた。

更紗がにつこりと微笑むと、その老人はふと言葉をもらした。

「婆さんと初めて会つた時みたいじゃ……」

「それはそれは……随分と綺麗な奥さんだつたんだ」

更紗はまったく着飾るということをしなないのだが、それでも確かに綺麗であつた。

その軽快な返答を聞いて、老人は思わず「かっかっか」と闊達な笑いをした。

「愉快的な娘っ子じゃのう」

更紗は隣に座ることを勧めると、老人はうなずいて腰を下ろした。

老人は、再び力に溢れる夏の木々に目を向けた。

本当にこの木は力強く、見ているだけで何かこちらまで元気になるようで心地がよかった。

「この木はどうやって育てているんじゃ？ 随分と見事なんで驚いたわい」

「……おじいさんは自分の子供をどうやって育てた？」

更紗は、不思議な返答を返した。

老人は興味深げに娘の話の先を待つ。娘は楽しげに語りだした。

「私がしたのは、自分で成長するその手助けをしただけ」

大抵の人はこのことを勘違いしている。例えば、早く大きくなれと水をあげすぎたり、土をどんどんかぶせたり、狭い土地にたくさんの木と一緒に植えてしまう。過度の期待と相手を考えない一方的な愛情が、かえって苦しめてしまうことは世間でよくある出来事である。一生懸命に面倒をみたら木が死にかけ、もとあった所のような条件にして放っておくと元気になるという話はよく聞く。

老人はそれを聞いて、苦笑いをしてしまった。

この街を活気のあるものにしよう……それだけを考えて、これまでの人生をすごしてきたのだが、出来上がったものは、この街とはまったく環境の異なる高級ホテルが一件と、整備された町並みと海岸である。果たして、この街を上手く育てることが出来たものだろうか、と考えていたところであり、老人はつい苦笑いをしてしまった。まったく、この娘っ子は気が強い。本当に婆さんのようだ、と心の中でだけ呟いた。

老人は言葉遊びを楽しむように、こう続けた。

「すると、わしのやってきたことは間違いないのかな？」

すると、更紗はにっこり笑ってこう続けた。

「そんなことないよ。私、元国道、好きだよ」

その一言を聞いて老人はしばらく考えていたが、やがて大きく笑いだした。

隣街とむすぶ道が街中にあるのだがそれが非常に狭く、この老人は思い切って街を囲むような国道を新たに作るうとした。しかし、地元の許可をえずに強引に作っていく途中でどうしても立ち退いてくれない神社があり、老人はとうとう作りかけで断念してしまったのだ。そんな国道となるべきだった道があり、それを街の人は元国道と呼んでいる。

ここは最近縁日になると神社から続く出店で賑わい、街の人の憩いの場の1つとなり、また普段は子ども達の遊び場でもあり、夜は

若者達のデートコースとなっていた。

老人のたったひとつの失敗が、この娘は一番の成功という。笑わずにはいられなかった。

頑固一徹な老人が、生意気な子娘に降参したとき、萌葱が軽快な足どりで何やら持ってきた。

受け取ると、それは一杯のお茶と、皿に置かれたひとつの梅干しだった。

「ごゆっくりしていつて下さいね」

元気な微笑みを返し、萌葱は家に戻って行った。

その後ろ姿はまさに元気の塊という感じで、老人は思わず遙か昔の高校時代を思い出してしまった。

「話に聞いていたが、随分と細身だのお……あれで、全国的に武道で有名とは……」

特に、この老人はこの家を調べたわけではなく、この街に住む人だったらこの家の三人娘について、この程度の知識は持っている。

老人は梅干しを少しむしり、味わって食べた。そして、熱いお茶をひとすすりする。

梅干しの酸っぱさが爽快で、さらにその後の熱いお茶が汗を吹き飛ばしてくれた。

「これは、上手い……」

「うちには名コックがいるからね」

「さきほどの娘さんのことかい？」

「いえ。末妹の舞姫です」

老人は驚き、そして何となく悲しくなった。小学生が作ったものが、そこいらの料理よりもずっと美味しいような気がしたからだ。良いものを、良い組み合わせで、適当な場に出すだけで、これほどまでに美味しいと感じるということを、老人は忘れていた。

そう考えると、今までやってきたことは何か物足りないような気がした。アプローチをかえれば、もっとずっとこの街に効果的なものが作り上げられたのではないか、そんな気がした。

「もう一度、人生を生きてみたいものだ……もう、こうなつては遅いがの」

老人がすっかり肩を落とすと、更紗は「すっぱあ……」と目に涙をためながら言った。

「暗いなら、電気をつけてやればいいじゃん」

老人は更紗が何か聞き間違いをしたのだらうと思ったが、そうではなかった。

「人生なんて一日みたいなもんじゃない。朝が幼年時代なら、昼は壮年時代。夜は電気をつければ寝るまでに少しは何かできると思う」これは、いま読んでいる中国古代文学からの受け売りだが、そのことは伏せておいた。

一迅の風が吹き、二人の間に風と葉が吹き抜けた。

「梅は咲いているときは綺麗だし、酸素も作ってくれる。実がなつたら梅酒も作れるけど、やっぱり梅干しが一番ね」

更紗は残りの梅干しを口に放りこみ、また涙を出しそうになっていた。

「それにおじいさんの作ったもの、きれいじゃないよ」

更紗はちゃんと、そうつけ加えた。

老人は苦笑いしたが、不思議な気持ちだった。

「何となく元気が出るのお……年甲斐もないが」

「ここはみんな、元気の塊だからね」

更紗は愉快そうに笑った。

二人はしばらく、取り留めもなく街のことについて話し、笑いあった。

考えてみれば、この二人ほど街のことを知っている者はいないのかも知れない。

老人はこの街を作った本人であるし、更紗はこの街の人達といちばん広く触れあっている。何かと街の悪口を言いながら、二人はともこの街を愛していることを確認した。

「あの市長、無類の女好きなんだが知っておったか？」

「知ってるわよ……秘書やらないかって声かけられたもん」

「大したもんだ、さすが県知事の娘に手を出しただけある」

二人は大笑いした。

夕暮れ時、夜の苦手な鳥が家路に急ぎ、鳴きながら飛び去っていく。

暑かった風が、いくぶん涼しさを帯びてきていた。

本当の公園のように所々に設置された電灯がつき、木々がぱあつと光りだしていく。

リーバイスの短く切り上げたジーンズとヘインズのＴシャツという、もつとも身軽な格好をして萌葱が家から出てきた。手には大きなトレイを持ち、上にはさまざまな土色の陶器がのっていた。

すぐ後から小柄な舞姫が、紫のドレスにリボンといういでたちで現れた。

「ずいぶん話が弾んでいるみたいね。夕食よ」

舞姫が落ちついた口調で言うと、更紗が舞い上がった。

「この匂いはもしかして肉ジャガ?!」

「……………そうよ」

「飲も!!」

更紗はだいぶ酒好きだった。

舞姫はあきらめたように空を仰ぎ、萌葱はクスクス笑いながらお酒を取りに行った。

更紗がウキウキして喜んでいる中、舞姫は老人の前にすつと座った。

「佐久間翁ですね。今日はようこそおいで下さいました」

小学生とは思えぬ気品と、緊張に満ちた挨拶だった。

「あなたが舞姫さんか。梅干し、うまかったよ」

舞姫はにこりと笑ってその返答を受けた。

「おっ酒! おっ酒!」

「更紗! 少しは落ちつきなさいよ!」

老人は思わず吹き出してしまった。

「これではどちらが姉かわからんなあ」

「よく言われます」

「本当に……」

舞姫はため息をついた。

今日の夕食は肉ジャガとほうれん草のおひたし、紫蘇ご飯と茄子の漬物だった。それぞれ、土をそのまま焼いたような自然な陶器類に盛られ、妙に食欲をそそられた。

お酒が来る前に更紗は肉ジャガに箸をつけ、「うーんっ、うまい！」と感動していた。

「どうぞ、佐久間翁もお食べ下さい」

舞姫に勧められ、食べてみたがどれも素晴らしく美味しかった。肉ジャガはコクがあるが甘ったるくなく、ほうれん草のおひたしは非常に新鮮でひねた味がまったくなかった。ご飯の上の紫蘇が香ばしい匂いを放ち、茄子の漬物もそれだけを食べても充分に美味しいものだった。

もちろん毎日、普通の美味しい食事を取ってきたはずなのだが、なぜか久しぶりに食事をしたような気持ちでした。

やがて萌葱が一本の日本酒と、数個の小さなグラスを持ってきた。「私、少し冷えたぐらいの日本酒がいちばん好きなの」

グラスにお酒をつがれながら更紗はそういった。

「わしはもつぱら爛だかな……」

舞姫につがれながら老人は呟いた。

三人の娘とひとりの老人が、和気あいあいと大きな木の下で食事をする。

蒼を通りこして闇になった空に、ひとつまたひとつと星がまたたき始めていた。

緑に輝く葉がひとひら落ちるなか、更紗がすいっとお酒が満たされたグラスを差し出した。

「乾杯」

「そうじゃな……」

萌葱も未成年ながらお酒をいただき、舞姫はオレンジジュースの入ったグラスを差し出した。

「かんぱあい！」

りん、とグラスの触れあう音が庭に響いた。

一組の幸せそうなカップルがくすくすと笑いながら通り過ぎたが、老人は不思議とあまり気にならなかった。笑いと、美味しい食事と、楽しい人と、自分の席——笑いなど大した問題ではなかった。くいつと酒をあおる。

純粋に透明な、冷たい液体が喉を落ちていき、胸で熱くなる。

美味しいお酒だった。

「ぶはあー……あー、幸せ！」

更紗は本当に嬉しそうだった。

幸せという言葉はときおり陳腐に感じるが、噛みしめているときはたまらない言葉だった。三人の「孫娘」と久しぶりに会ったような気分がする。

軽い若者の話も快く、姉妹がじゃれあっている姿を見るとなんとも幸せだった。

ほどよく酔いがまわってくる。

何か大声をだすか、踊りたい気分にかられた老人はふと縁側に立てかけてあった木刀を見つけた。

「……大した踊りじゃないが、剣の舞を久しぶりに舞ってよろしいかな」

中国古代から行われている、剣を用いた兵士に好まれる舞いを、老人は少しかじったことがあった。

すぐに了解した萌葱が木刀を二本持ってきた。

「ご一緒してよろしいでしょうか？」

「もちろんいいとも……」

老人はついつと剣を水平に高く構え、何かの音楽を口ずさみなが

ら踊りだした。

萌葱もそれに唱和し、剣の相手をした。

中国の剣の舞いはもともと、宴会の途中で演舞を装って人を殺してしまおうという要素がたぶんにあり、その相手を誰かが申し込み、陰謀を阻止するのがもっぱらであった。

そのためけっこう派手な舞の部分もあるのだが、二人の行った舞はどちらかというと日本風な静かな舞であった。

舞姫がすつくと立ち、音楽に合わせて不思議な踊りをおどり始めた。

大きな動き、小さな舞い。体全身を使った何か訴えるような舞だった。

見る者をくぎ付けにしまうような、不思議な魅力を持ったような舞——「舞姫」の名は伊達ではなかった。

それならばと、更紗も加わった。

更紗は踊れないが、音楽に合わせて元気に体を動かした。

酔ってじんつとする頭で老人は三人を見た。

真っ赤にした幸せそうな更紗の笑顔が、間近にせまる。

あくまで真剣に相手をしてくれる萌葱の顔。

幼いながら、気品と美しさに満ちた舞姫の踊り。

木々の葉が舞い降りてくる。

夢の中にいるような、浮遊感をかんじる。

「おじいさん、気に入った！　こんど何か困ったことがあったら、百円でみてあげる」

日本最高額を掲げる更紗が、踊りながらそう言った。

「嬉しいのお……では、こんどホテルにいらっしやい。貸し切つてやろう」

「わあ！　こんど絶対にいくよ。おじいちゃんも一緒にプールに入ろうね」

あはは、と老人は笑った。

ふと上を見上げると、天空にぽっかりと浮かぶ月は満月だった。

一週間後、更紗達は佐久間翁の訃報を聞いた。

突然の死だった。

「あの日、更紗がいつもと少し違ったのは、このためだったの？」
舞姫が更紗に聞くと、更紗は悲しげに笑った。
別に死を事前に察知できたわけではないのだが、この老人を楽しませてあげたいという気持ちから、彼の妻だった人が乗り移ってくるのをそのまま許し、ときおり彼女に体の権限を譲ったりしていたからなのだ。

舞姫はふだんの更紗と様子が違うことに気づいていたが、多分そんなことだろうと思って調子を合わせていた。

更紗と一緒に暮らしていれば、そんなことは良くあることだから。そして、きつと、佐久間翁も懐かしかったと思うから。

三人は喪服に着替え、佐久間翁の邸宅に行った。

彼の息子が喪主であった。

三人を見かけると、彼は一通り挨拶をし、「父の遺言です。いつかホテルの方にいらして下さい」と告げた。

更紗は涙が出そうだった。

佐久間翁は約束を忘れていなかった。

「私は約束を果たせられないのにね」
ひとすじだけ、涙がこぼれた。

その数日後、更紗はまたぼうっとして木の下に座っていた。
あの時と同じように、晴れ渡ったある夕暮れ近くだった。
そこにリュックを背負った少年が現れ、更紗の前に立った。
その少年をどこかで見たことがあったのだが思い出すことが出来

ずにいると、その少年は百円を差し出してこう言った。

「……佐久間芳春といいます。どうか僕を引き取って下さい」
記憶が甦った。この少年は、あの老人の孫だった。

「何か困ったことがあったら、百円でみてあげる!」

「嬉しいのお……では、こんどホテルにいらっしやい。貸し切ってやろう」

今度は涙は出なかった。

「どんな理由があるか解らないけど……」
百円を受け取る。

「約束したからね」

少年は少し安堵したようだった。

「更紗あー! 食事よお!」

舞姫の声が庭に届く。

「夕食だつ、一緒に行きましょう!」

そして、更紗は重そうなりユツクを背負った少年の手を取り、大きな木の家に向かった。

月夜の晩の、そんな話。

其之式 「子の気持ち、親の気持ち」

神無月家の夕食は、大きな庭の中で開かれていた。

夏の夕暮れ。

街をあたたかく包みこむ風。

ぼつり、ぼつりと家の明かりがつく度に、空に星がまたたき始める。

街がゆるやかに夜を迎えようとしていた。

大きなお皿に、ぼん、と盛られたスパゲッティが「食べて！」と待っているようで、見かけよりずっと大食いである長女の更紗は、そのスパゲッティをむんずとフォークでからみとった。

こうばしい香りを放つスパゲッティに意識が向きがちだが、優しい瞳は大人しい感じの一人の少年をとらえ、興味津々な光を放っていた。

すっきりと切り揃えた柔らかな髪。一つ一つがしっかりとした線でできあがった顔立ち。両家のお坊っちゃまを絵に描いたようなこの少年の名は、佐久間芳春>サクマ ヨシハル<といった。

「佐久間翁に似ない、いい男ね」

更紗>サラサ<は笑顔でそう言ったが、芳春は視線一つ動かさず沈黙を守った。

家にきてからずっとこうである。

初めに、「……佐久間芳春といいます。どうか僕を引き取って下さい」といったきり、一度も口を開いていない。

更紗は気まずげに、スパゲッティを口に運んだ。

あれは10日ほど前の夕暮れのこと……この少年の祖父が突然、この家に尋ねてきた。死ぬ前にこの街のすべてを見たくて、この家に来たという。

愉快なお祖父さんで、その晩はずいぶん遅くまで飲み明かした。

「何か困ったことがあったら、百円でみてあげる！」

「嬉しいのお……では、こんどホテルにいらっしやい。貸し切つてやろう」

酔った勢いで、そんな約束をした。

お祖父さんはすべてを見終わって、そして死んでしまった。

少年のような容姿をした、次女の萌葱>モエギ<が助け船を出した。

「ねっ、ねえ。芳春君、スパゲッティ、食べて。遠慮せずに」

それでも、芳春は動けずにいた。

きつと、恐いわけではないのだろう。

ただ、おじいちゃんが死んで、急に知らない人達に預けられるようになったわが身を考えると、どうしたらいいのか解らなくなってしまったただけなのだと思う。

それからしばらく、更紗と萌葱が芳春の心をときほぐそうと苦勞したが、優しい言葉と明るい冗談はすべて徒勞に終わった。

電灯が青白い光を庭に落とす。

あたりはすっかり暗くなっていた。

更紗と萌葱は言葉も出尽くし、二人して困り果てていた……この調子なら、佐久間翁には申し訳ないのだが、引き取るべきではないのかも知れないとさえ、思った。

しばらく気まずい静寂が続いたが、芳春と同じように沈黙を保ち続けていた一人の女の子の言葉によって、それは破られた。

「冷める」

三人姉妹の残り一人、末妹の舞姫>マイヒメ<の声に、萌葱と更紗の顔が向いた。

「料理は、美味しく食べてもらうために、最高の状態で出されるのよ」

舞姫の強い語調に、芳春の顔がほんの少し持ち上がった。瞳が自

然と舞姫をとらえる。

肩の位置でさっぱりと切ったストレートの髪が、ゆるやかな風で流れる。意志の強さを表すようなきつい大きな瞳は、限りなく澄んでいた。

舞姫が目をつぶると、怒ったような表情はあたたかくなり、彼女は両手を前にあわせた。

「料理はね、素材に怒られないように一つ一つ丁寧に作り上げていくものの。スパゲッティをゆでるにしても、塩をどのくらい入れるにしても、バターを溶かすにしても」

舞姫は目を開ける。美しげな表情が、風とともに芳春に届いた。

ドキドキしているのを、芳春は感じた。

「その結果として『美味しい』といわれて、素材も作った人も満足するの」

そこまでは天女の言葉だった。

「それを……冷やした上に、残すなんて許さない！ フォークを持って！」

「はっ、はい！」

芳春が飛び上がるように返事をして、フォークを取った。

「いただきます、は！？」

「いただきます！」

芳春は、かけ込むように食べ始めた。

「急いで食べなくてもいい、美味しく食べて」

芳春は思わずむせて萌葱の水をもらうことになったが、それから ゆっくりと食べ始めた。

萌葱は啞然としてこの様子を見ていたが、更紗はやがて吹き出すように大笑いした。

少しは和やかになった雰囲気は、あたりの様子も明るくした。

芳春は初めて外で食べているという事実に気づいた。

風が吹いている。

目の前には家が立ち並ぶ。

黒い海とが見える。

青白い月が浮かんでいる。

甘ったるい風も美味しく、スパゲッティはいつもより多く胃の中におさまってしまった。

「部屋は、舞姫の隣部屋を使ってね。好きなように使っていていいから」

「……はい、お世話になります」

やっと、素直に言葉が返ってくるようになり、更紗はにっこりと微笑んだ。

やがて食べ終わると萌葱と更紗はさっさといなくなり、計られたように二人残された芳春と舞姫は、台所で後片づけをすることになった。

台所は、三方から強いライトが照らすだけの、落ちついた空間だった。

木とタイルを基調とした床と壁に、夜と昼をつくり出すライト。

きれいに磨かれた床とキッチン。

たぶん、舞姫がいつも使っているらしい、微妙な緊張感と温かさがあった。

流しの横に使われた食器をおくと、舞姫はキッチンの上に飛びのる。

「はいっ」

と、芳春に食器拭きの布を渡すと流しの蛇口をひねり、お皿を洗い始めた。

一枚、また一枚と流れる水にお皿をひたしていく。

その手際のいいこと、芳春がいくら頑張っても舞姫の半分でしかなかった。

さっさと洗い終わると舞姫は流れるお湯を止め、自分の手を拭いていたが、芳春はまだぜんぜん終わっていないかった。

そんな一生懸命、汗を出しながらやっている芳春の様子を、仕事の終わった舞姫は思わずばおーっと眺めてしまった。

何となく不思議な気分だった。家族が減ったのと同じぐらい、不思議な気分だった。

同い年の少年がライトに照らし出されて、お皿を拭いている。

よくみるとけっこう端正な顔立ちをしていた。

優しいそうではあったが、力の抜けたところがない。舞姫と同じように一種の緊張感がある。

芳春の手が止まり、恥ずかしそうに舞姫を見つめる。

「あの、何か……」

「あつ、いえその、天涯孤独って寂しくないかな、と思って」

言った後に、舞姫は激しく後悔した。なんて言うことを聞いてしまったのだろう、と。

「あの、父がまだ生きていますが」

「えっ!？ あつ、そういえば」

葬式で挨拶したのは芳春の父だった。

「あれ？ だったら何故、この家に来たのかしら？」

芳春の表情はかわらなかった。

「父と祖父が話し合って、もしもの時はここに行くようにと……」

舞姫は大きな目をまん丸に開き、芳春を見つめた。

「何故かしら」

芳春はちよつと首をかしげて、そしてまたお皿を拭き始めた。

舞姫はしばらく顎に手をあて芳春のことをじつと眺めていたが、

突然、流しからふわりと舞い降り、芳春の前に降り立った。

背はだいたい同じぐらい。

きつそうな、それでいて鮮烈なほどに澄んだ瞳が、じつと自分を見つめるのを感じた。

「上から話しかけるなんて、礼儀知らずだわね」

舞姫は珍しくわずかに笑みを浮かべた。

「まずは挨拶からね。私は、神無月舞姫。これから宜しくね」

彼女はそういつて、手を差しのべてくれた。

芳春は舞姫のとなり部屋をあてがわれた。

かなり広い部屋だったので聞いてみたところ、もとは両親の部屋だったと舞姫が説明してくれた。

「……お亡くなりになられたのですか？」と芳春が聞くと、舞姫はけらけらと笑った。

舞姫の両親は単身赴任で少し遠くの大都市に暮らしているが、ちゃんと生きている。子供達もそれについていきたかったのだが、更紗がこの家を継いだ時点で残ることになっただけである。

「寂しくないですか？」

「毎月一度は必ず帰ってくるわ。お土産つきでね」

家族なんだから好きなように使っていいから……と言いつつ残して、

舞姫は部屋に戻ってしまつと、急に静けさが広がった。

確かに広い部屋である。

畳張りの、ちよつと薄暗い部屋。

芳春はぺたんと座り込んだ。

寂しい気持ちになるかと思つたのだが、不思議とそれほど寂しくはなかつた。

一人になれているせいかとも思つたが、そうじゃなかつた。

さっきの舞姫の笑顔が浮かぶ。

同じ学校の同じ学年。隣クラスだったけど、舞姫のことは少し知つていた。

綺麗で、しっかりしていて、凄く冷静な人。

話もしたことがなくて、どちらかと言えば恐かつた。

でも、さっきは違つた。

話していた時、心が暖かくなつた。

今も、隣から音が聞こえる。

それだけで十分、寂しくはなかつた。

芳春は安心して、神無月家の最初の夜を布団のなかですぐすことになった。

その頃、芳春の父はホテルにある大きな一室で、いつものように膨大な量の仕事をこなしていた。大きなホテル、20ある旅館、33の店、この土地に関するいくつもの仕事の書類が机に山積みされている。

「ふう」

顔をあげると、昔とった自分と妻と芳春の3人の写真が、目に入った。

実用性を第1に考えたこの室の中で、唯一の有機的な存在であった。

その写真立てをふと手に持ち、芳春の顔をじつと見つめる。

「……芳春……、親父は何を言いたいんだろうな」

愛息だといっても実際に顔を会わせるのは月に一回、それもほとんど寝顔であることが多かった。

それでも、元気で育っていてくれるし、別に死ぬわけでもないの
で、あまり会いたいと言う気持ちは湧いてこなかった。

可愛くないわけではない。ただ、あまり心配ではないのだ。

いい子に育っている、それだけで十分。

あとは、なるべく自由に生きて欲しい、そう思っているだけである。

自分は親に徹底的に監視され、家をつぐことを強要された。

「知っているかい、芳春？ 僕の兄がそれに耐えられなくて成年の日の前日に自殺したことを」

自分は大丈夫。

とにかく、どんな苦痛でも機械的に受け取れる能力がある。

それが良いか悪いかは解らないが。

芳春の父は、なんとなく苦笑してしまった。

「親父、俺は息子を手元におけないほど、それほど親父にとって駄目な男なのかい？」

生前には決して言えなかった言葉が思わず口からこぼれてしまうほど、今日は何となく寂しかった。

ぱちくり。

芳春は一瞬だけ、自分が何処にいるかを考えてしまった。体を起こし、あたりを見渡して、納得する。

「家じゃないだ」

その事実を確認することは、まるでクラブの合宿のように、何となく心細くはあったが、それでもやはり寂しくはなかった。

何しろもといた家でも、ほとんど独りだったのだから。

かついできたリユックから服を出し着替えると、そおつと襖を開けて外をうかがった。

誰もいないことを確認すると部屋を出る。

何はともあれ、階段を降りていった。

階段を降りるつれて、眩しくなる。

だんだんと、いろいろな声が響いてくる。

何の声だろう。

たん……階段を降りきると、そこには明るい道場が見えた。

声はそこにいた十人ほどの、合気道をする老若男女たちのものらしい。

その中に、ひととき目を引く、次女の萌葱がいた。

まるでモデルのような、軽やかな立ち振る舞いを思わず眺めていると、向こうがこちらに気づいてしまった。

いたずらっ子のような表情を浮かべ、芳春の方へ走ってくる。

いいも知れぬ悪い予感がして逃げようとしたが、先に萌葱に抱きかかえられてしまった。

「芳春君、つかまえた！ みんなあ、今日からの新しい仲間です

！」

まるで宝物をみんなに見せまわるように、抱きかかえたまま芳春を紹介をする。

みんなが笑いながら、それに応じてくれた。

こんにちは、よろしく、と。

その勢いのまま柔軟までお付き合いしてしまったが、まだ食事をしていないことをどうにか説明して、芳春は逃げだすことに成功した。

何とも、賑やか。不思議な驚きだった。

胸をなでおろしながら食堂へつづく廊下を歩いていると、庭の木の下で寝ている人がいた。

更紗だった。

昨日と同じ、櫺の下の木陰で、心地よく墮眠をむさぼっているように見える。

そして、食堂についた。

ここだけは、他と雰囲気違った。

暗く、落ちついている。

窓が流しのところに一つだけあって、そこだけが明るい。

ほかは昼間とは思えないくらい、暗く落ちついていた。

「いま、起きたの？」

庭からの逆行をあびた舞姫が、土間に立っていた。

手には、大きな洗濯力ゴを持ちながら。

「はっ、はい」

「じゃあ、そこに座って」

芳春が椅子に腰掛けると、舞姫は洗濯力ゴを置き、とんと脚立の上からコン口の横に飛び乗り、鍋に火をつけた。

もうすでに、温めた後らしく鍋はすぐに沸騰しはじめ、舞姫はそう麺をゆるやかにながしていく。

こと、こと、こと……

鍋から沸騰した泡が白くはじけるのを、しばらく舞姫は見つめる。

その横顔を、芳春は見つめる。

暗く落ちついた台所に、庭からの光が沸騰する鍋と舞姫だけを照らしあげる。

なんて、綺麗なんだろう。

泡のなかで、白いそう麺が見えかくれする。

舞姫の髪も、庭からの風に揺れていた。

ついつと舞姫が向きを変え、すでに用意してある薬味を切り刻みはじめた。

それにしても手慣れたもので、まるで一つの川の流れのように用意が進み、気づいてみれば机の上にそう麺が出来上がっていた。

二人分。

「お腹すいたあ」

さつき舞姫がいたところに、更紗がいた。

ちよつとぼさぼさになった髪をかき分けながら、椅子に座る。

「教えてもいないのに現れるのよね」

更紗は気にせず、手を合わせる。

「いただきますあす」

呆然と更紗を見ていたが、ふと舞姫の視線を感じて、芳春はあわてて「いただきます」と言っ、そう麺を食べはじめた。

本当に舞姫の料理はおいしい。

冷たいそう麺がするりと喉を通り抜けていくとき、芳春はそう思った。

とにかく、なんて言うか、舞姫の料理は人を喜ばせる。

大事に、大事に食べたくなってしまう。

そう思っている間に、更紗はさつさと食べ終わってしまった。

「ごちそうさま」

「はいはい」

芳春は焦った。

食べはじめの前から舞姫がずっと見つめていたのだが、食べ終わ

った更紗も見つめはじめた。

静かな台所に、ずずつ……と自分の吸う音が響くとよけいに、はずかしくなった。

思わず喉につつかえてしまうと、更紗は大笑いし、舞姫は静かにすばやく水をくれた。

「美味しく食べなさい」

舞姫が、昨日よりもずっと優しい口調で、声をかけてくれた。不器用だけど、舞姫らしいなぐさめ方なのかも知れない。

更紗はまだ机につつぶして、笑っていた。

舞姫も、つられて笑顔になって、やっぱり芳春を見つめる。

突然、更紗はがばつと体を起こした。

「お父さんに会いに行こう」

また喉につまらせてしまった。

これには、舞姫も声をあげて笑った。

更紗もやっぱり笑った。

芳春には信じられないくらい、のどかな昼食風景だった。

ホテル、いつもの部屋で芳春の父は働いていた。

そこに、フロントに立っていたはずの従業員が現れた。

「支配人、御子息様がいらっしゃいました」

父は、しばらくなぜ息子が来たのか思い当たらぬようにしばらく考えていたが、やがて腰をあげた。

部屋を抜け、広い事務室を抜け、フロントに出る。

十階まで吹き抜ける広いロビー。

茶褐色の大理石を主とした落ちついた床が、外からの夕焼けと周りのライトで照らされる。

その中、雑踏の中、3人の一際めだつ娘達に囲まれて、息子がいた。

その美しい娘達に、見覚えがあった。特に、長女の更紗に。

父は、ちよつとのためらいの後、更紗に声をかけた。

「ようこそ、おいで下さいました。本来なら、こちらから先に御挨拶に行かねばならないと言うのに」

「良かったら、」

言葉の途中で、更紗の声が入った。

「は？」

「良かったら、御一緒に夕食を食べませんか？」

「……」

最上階、この街一番の展望を誇るレストランの一番おくまったテーブルに、5人は座った。

窓の下では、だいふ暮れかけた夕焼けに浮かび上がる、祭の様子が見えた。

元国道ぞいに沢山の露店、家族、恋人、友達などが溢れている。

家の明かり、ライトが次第につきはじめる。

次第に、夜になっていく。

山ぞいに浮かぶ月が、しだいに白く光りはじめていた。

「息子が……芳春がなにか」

父は、芳春が何かをしたために、もしくは祖父の約束がデマだったために、芳春が返されるのだと、想像した。

いや、息子もそんな悪い人間でもないし、祖父もデマを言うような人ではない。

息子は父と一緒に住んだ方がいいと言う理由だろうか？

芳春も、同じようなことを考えていたが、更紗の答はその逆だった。

「芳春君を、いただきに来たのです」

「……？」

「芳春君をすっかり気に入ってしまいました。彼さえよろしければ、佐久間翁との約束通り、預かりたいと思って」

その後、更紗は「こんな娘が当主ですが」と照れ笑いをつけ加え

た。

父は不思議な気分だった。そう言われて急に、寂しい気持ちがしたのである。

他人に大事なものを盗られたような、寂しさ。

それでも、父は芳春に目を向けた。

全ては、芳春自身の気持ちに任せるつもりだった。

「ぼつ、僕は、どちらでも構いません」

そうか、どちらでも、か。ならば、祖父の約束は絶対である。

「祖父との約束通り、どうぞ宜しく願います」

更紗は、につこりと微笑んだ。

「解りました。責任を持って、預からせていただきます」

更紗がピース、ピースと芳春と舞姫にサインをおくったが、舞姫はつれない顔、芳春は苦笑するしかなかった。

料理が運ばれてきた。

まずは、前菜とパン。

「いつも、このパンのせいでお腹一杯になるんですよ」

と愚痴ったのは、常にお腹をすかしている萌葱だった。

目に前にあるものは、だいたい口に運んでしまう彼女は、一品ずつ持ってくる中華料理をもっとも苦手としている。最初の方でお腹をすぐに一杯にしてしまい、最後まで食べた経験がないのである。

西洋料理でのネックは、このパンだった。

どうしても、メインディッシュがくる前に、食べ過ぎてしまうのである。もっとも、体格からは想像ができないくらい食べるのであるが。

いつものようにずっと黙っていた舞姫が、前菜に手をつける前に、芳春の父に目を向けた。

「一つだけ、質問をしてよろしいですか？」

「なんででしょうか？」

「息子と離れて暮らして、寂しくはないですか？」

実際のところ、それほど寂しい気持ちがしなかったなので、返答に

おもわず口ごもってしまった。

「息子にとつていい経験になれば」

とだけ、答えた。

更紗は、いつもの調子で前菜をぺろりと平らげると、「舞姫の方が美味しいわね」と呟きながら、言葉を続けた。

「実は今日、突然こちらに來たのには、理由があるのです」

舞姫が思わず、「本当に考えた行動なの？」と疑わしげな視線をよこしたが、更紗は構わず続けた。

「芳春君がなるべく早く馴染んでくれるように、早くお父さんに会っておきたかったのです」

ふむ、と頷いたが、ちよつと首をかしげた。

「会つて、それで？」

「いやその、会つて話をすれば、今あるつつかえが取れるかななんて……」

舞姫が、「やっぱり何も考えていない」と苦々しい顔をした。

でも、芳春には何となく理解ができた。

神無月家にもらわれることに、あまり抵抗はない。が、でも何となく、つつかえがある。何だかしらないけど、心が苦しい。

なぜ、更紗はそれを知っているのだろう？

「それに、佐久間翁との約束も早めに果たしておいた方が、あなたのつつかえも取れるかな、なんて」

あはは、と更紗が笑つたのに対して、父は強く頷いた。

「そうですね。貸し切りにはできませんが、どうぞお泊まり下さい。

祖父も喜びます」

祖父。

舞姫のスープをはこぶ手が止まつた。

「もう一つ、お尋ねしてよろしいですか？」

「はい」

「佐久間翁はどんな考えがあつて、芳春君を預けることにしたので

しょうか？」

これには、さすがの父も答えられず、しばらく沈黙が続いた。

「私も知らないのです。御存じないでしょうか」

舞姫も更紗も首を横に振った。

「そうですね」と言っ、ため息をひとつ。やはり、私のせいなのだろうか？

何はともあれ、考えるのはよそう。

ほとんど会えないのだから、むしろ彼女達に任せた方が芳春にとっても幸せのはずなのだから。

「それにしても、御聡明な方ですね」

「末妹です。姉としては、肩身が狭いです」と更紗が言うと、父ははじめて笑った。

「芳春と同級でしたね。話を聞いたことがあります。どうぞ、宜しくお願いします」

「こちらこそ」

「今日は、貸し切りの代わりにスイートにお泊まり下さい。プールの方は8時で終わってしまいますので、それから貸し切りにしましょう」

外の夜景はいつしか、街の明かりだけとなっていた。

ホテル別館、プール。

50メートルのレーンが8つ、深さは1メートル30センチ。

天井は2階分の高さがあり、ほぼガラス張りになっている。

そのガラス張りの天井は、蒸気にその面を曇らせているものの、本館からもれる部屋の明かりをまるで星のように映し出していた。

白い床、白い壁、白い監視台。

カフェテリアとジムがガラス越しに見渡せる。

そんな豪華なプールに、いまは4人しかいなかった。

スポーツ万能の萌葱が、その細い体をゆったりと曲げ、ぴったり

とスタート台に手をつける。

足はピンつとのばし、顔だけじつと正面を見据える。

髪からは、水滴がしたたり落ちていた。

「よぉーいつ……どんっ！」

更紗のかけ声を合図に、萌葱がきれいな弧を描いて、水面に没する。

水しぶきや音がほとんどしない。

すいっと15メートルほどを魚のように水中を進むと、水面に上がりクロールで泳ぎはじめた。

さして急いでいる様子もないのに、かなり早い。

「おかしいわね。こぐための表面積は小さいはずなんだけどなあ」

「その分、水のアたる面積も小さいからね。更紗とは違って」

「本当に、きれいな泳ぎですね」

三人三様の言葉を呟きながら、萌葱を見守る。

萌葱はさつさとターンをすまし、やおら潜水した。

すい、とこちらに向かってくる。

「やばいっ」と言うが早いか、今までプールサイドで落ちついていた更紗と舞姫が、床に上がった。

「えっ？」

対応の遅れた芳春は、またしても、萌葱に抱きかかえあげられた。
「わぁ！」

と言う間もなく、萌葱が全力で泳ぎだし、芳春の体は反対サイドまで持っていかれた。

「あはは、大丈夫？ 芳春君」

「だっ、大丈夫です。泳げますから」

「よし。じゃあ、肩をつかんで。しっかりと」

「えっ？」

萌葱が背中を向く。わけも解らず、肩をつかんだ。

萌葱は、水中に入った。

肩をつかんでいるだけで必死だっただけが、凄い光景だった。

ぐんぐんと壁が近づいてくる。まるで、本当に魚になったような気がした。

「ぷはあ！」

「おかえりい」

芳春の目はまん丸に見開かれていた。

「えらい、えらい。よく手をはなさなかったね」
きれいだっただ。

溺れている状態に近かったかも知れないけど、でもプールの反対側まできれいに見渡せた。

お魚さんは、あんな光景なんだろうか。

更紗の手をかりて、床に上がると、しばらくぼおっとしてしまった。

かわって、更紗もざぶんと入り、萌葱はどんどん泳いでいってしまった。

少し落ちつく、横に舞姫が座っていることに気がついた。

黒地のワンピース。胸元にちょっとだけ花のようなアクセントのある、すっきりとした水着につつまれ、舞姫がすぐ横に座っていた。

「まっ、舞姫さんは泳がないのですか？」

初めて名を呼ぶことにちよつと緊張してしまった。

「えっ、いや……その……こうしている方がいいの」

舞姫の方の反応はすいぶんと意外だった。焦っていた。

眉目秀麗、成績優秀、沈着冷静の彼女。

「もしかして、舞姫さん」

「そうよお、舞姫は泳げないの」

更紗がぱたぱたと、水をたたきながら言った。

「それじゃあ、教えてあげますっ！」

「いいわよ。別に泳げなくなっただけ」

「教えてあげます。舞姫さんには、いろいろ教えてもらったから」

芳春の真面目な言葉に、思わず舞姫は真っ赤になった。

「そっ、それじゃあ。少し」

「ひゅう、ひゅう！」

「うるさいわねっ！ 更紗っ！」

「それじゃあ、向こうの浅い方にいきましょう」

「……うん」

プールの奥にある浅い場所へと二人だけで、行ってしまった。

更紗は、くつくつと笑いながらそれを眺めていた。

疲れてきた萌葱と、更紗は一緒に床に上がり、その二人の様子を眺めた。

「不思議な光景ね。芳春君、引き取って良かったわね」

萌葱がそう言つと、更紗がぷうつと吹きだした。

「あの、あの堅物の舞姫が、顔を赤くしてっ！」

「いい傾向じゃない。私の初恋も、あの頃だったなあ」

ひとしきり笑つと、静かにその二人の様子を眺めはじめた。

いい子じゃないか。

それにだんだんと馴染んで来ているし。

「お父様も誠実そうな方だったし」

「うん、でも」

「でも？」

「何というのかな、誠実だし真面目だと思うけど、あのお父さんこのプールみたいな気がする」

「プール？」

萌葱は、いちどこのプールを眺めまわした。

でも、何の違和感も感じない。

「プールって、どういう意味？」

「萌葱がこのホテルのオーナーとする。あなただった、どうやっておもてなしする？」

「プール、食事、ジムでみんなでワイワイ」

「そうそう。でも、あの人は一人が好きみたいね」

「ふうん」

「正しくは、一人が寂しくはない。一人でいることの方が普通なん

じゃないかな。こうやって貸し切る方がもてなしだし、自分は顔も出さない方がもてなしてみたいね」

舞姫は絶対に信じてないが、この更紗も良く考えているし感じていることを、萌葱は知ってた。

それに比べて、自分は何も考えていないし、感じていないことを嫌に思うこともあるのだが、

「いいの。だから萌葱はいつも幸せだし、周りも思わず幸せになっちゃえるから」

と言う更紗の言葉で、安心している。

「このプールは豪華だし、綺麗だし、隅から隅まで注意が行き届いているけど、私からみると寂しいような気がする」

「でも、プールなんて、そんなものじゃないの？」

「うっ、そうかも」

前言撤回。やっぱり、大して考えていない。

「でも、何となく、解る気がする」

芳春君を見ていると、そう思う。みんなが当然持っているものを、彼は持っていないような気がする。

彼はここにきてから、初めて外にでた小鳥のように、目を白黒させてばかりいる。世界はこんなに広いんだよ、楽しいんだよと、思わず連れ回したくなってしまう。

まあ、更紗の言葉に変えれば、からかいたくなる、だろうけど……。

視線の向こうで、真面目な二人が真面目に泳ぎの練習をしていた。ほほえましいほど、真面目に。

「この部屋ね」

渡された鍵で、部屋の扉を開ける。

「スウィートと言っていたけど、本当に豪華かな？」

ゆっくりと中の様子が見えはじめる。

「これは凄いつ！」

「わぁ」

更紗達の泊まることになった部屋は、想像以上に凄かった。部屋は6室を数え、寝室、居間は当然のこと、ビリヤード台、それに高級酒の並んだカウンター付きのカジノ部屋まであった。

最初入ったところが居間でいちばん広く、グランドピアノが無造作に置かれていた。

「これ、みんな無料なのっ?!」

「更紗……はしたない」

「いつ、いいじゃない。こんな時くらい」

外の好きな萌葱が一番にベランダまで出ると、そこにはちょっとしたプールまであった。

夜空にライトアップされた淡い水色に照り光るプールの横を通り過ぎ、手すりまで走っていく。

萌葱の想像通り、海からの風が吹きかけてきた。

「気持ちいい！」

他のみんなもぞろぞろと外に出てきた。

「凄い豪華さね」

「僕も来たのは初めてです」

舞姫と更紗のスカートが風に大きくはためく。

風に揺れる髪を後ろに流し、更紗は大きく伸びをした。

「うーん、いい気持ちっ！」

遠くで、海を眺めてはしゃぐ萌葱。

すぐ前で、大きく伸びをする更紗。

後ろで、なびく髪をおさえる舞姫。

そのまま写真にして、残しておきたいような光景だと、芳春は強く思った。

プールがさざめき、キラキラと光っていた。

「芳春君、わたし、お礼がしたい」

「えっ? でも、僕は何も」

「おじいちゃんの代わり。お礼したい気持ちなの」

舞姫が、頭をかかえていた。

「また、お金がからまない仕事ばかり」

「仕事じゃないと思うと、いくらでもしたくなるのっ！」

「えっ、えっ？」

「お母さんに会わせてあげる」

「えっっっ！！」

舞姫が、部屋の中からなにやらとつてのついた花瓶を持ってきた。

「こんな感じでいい？」

「ちよつと重そうだけど、いいか」

「あの、母に会うつて」

「会いたくない？」

芳春はぶんぶんと横に首を振った。

写真でしか会ったことがない、僕を生んで死んでしまった母に、

何度も何度も会ってみたいと思っていた。

でも、会わせるって。

「なにしろ、この道のプロだから」

そう言つて、更紗はにつこりと笑った。

水のいっぱい入った花瓶を両手で持ち、プールサイドまで歩いていく。

まるで、彼女にスポットライトがあたっているように、花瓶をゆつくりと頭上にあげた。

「……」

何かを呟いているらしい。

まるで、神に祈りを捧げる巫女のように。

花瓶をぶあつと回し、プールに何か文字を書いた。

円、三角、線、文字、絵。

何やら、文様をプールの上に描いたらしい。

空になった花瓶をおき、くるりと振り返る。

風に全身の服をなびかせながら、こちらに来るように手招きして

いた。

「はい！」

自分達が向かって行くにつれ、更紗が近づいてくる。

すぐ目の前に来ると彼女はひざまずいて、視線の位置を合わせる。

「来たわよ」

「えっ？」

更紗に後ろがまばゆく光った。

まるで、ライトの光を一カ所に集めたような光。

その光が次第におさまると、そこには一人の女性が浮いていた。

髪をきつちりと結び、和服を着たまだ20代の若い女性。

更紗がびつくりした。顔立ちが、自分とかなり似ている。芳春の

父が戸惑ったりしていたのは、きっとこのせいだったのだ。

「お母さんっ！」

「芳春。ああ、初めて名前を呼べたわ」

プールの上に浮く、幻像のような芳春の母の頬には涙が伝っていた。

「あとは抱くことができたなら本望なんだけどねえ」

「お母さん……」

「芳春、元気そうで何よりね。ちゃんと守ってやるからね、これからも」

芳春は、何を言ったらいいのか解らなかった。たくさん言いたいことがあったような気がするのだが、何も思い出せはしなかった。

ただ何となく、嬉しくて、寂しかった。

「更紗さん、うちの子をどうぞ宜しくお願いしますね。何やら、義父から夫まで迷惑をかけているようですが」

「いえ、こちらこそ、お礼を言いたいくらいです」

後ろの方で、花火が上がった。

お祭の終わりに合図代わりに打ち上げる花火が、赤い火の弧を作って夜空に消えた。

「懐かしいわ。あの人にプロポーズされたのもこのお祭の時なのよ

ね。あなたが生まれたのも、この頃だし」

からからと、笑った。かなり明るい性格らしい。

「芳春、言いたいことはあまりないわ。とにかく遊びなさい、恋を
しなさい」

知ってか知らなくてか、舞姫のことをちらっと見つめ、そして向
きなおり、芳春の瞳を真剣にじっと見据える。

「そして、幸せにな리なさい」

命令口調だが、その中にこらえきれないほどの優しさが含まれて
いた。

幸せになりなさい……。

芳春の胸が、ぐつときた。

いいたい言葉も、何も言えなくなってしまうほどに。

「芳春君のお母さん、良かったら私の体をつかいませんか？」

「ああ、乗り移るのね？ でも、いいわ。そんなに多くをのぞんじ
や、他の人に悪いわ」

「それじゃあ、明日。あの人をお祭に誘いますから。いかがですか
？ 親子水入らずなんていうのは」

「夫をですか？ それなら、お言葉に甘えようかしら。なにやらあ
の人、今回のことでぐじぐじ悩んでいるみたいだから」

芳春の母は、ちよつと蹴るようなまねをした。

「そのなまっちよろい根性に、ちよつといっぱつ蹴りを……あら、
はしたない」

やっぱり、面白い人だ。

あの人に、実に合いそうな明るい女性だった。

「また明日ね。芳春」

そう言つと、出てきたときのようになまゆい光をはなち、消えて
しまった。

あとはただ風と、花火の音だけが残った。

そして、次の日の夕方。
祭の最終日。

外は、雲一つない晴天。

そして街は、夕暮れを迎えようとしていた。

芳春の父は、いつもと変わらぬスーツ姿で、ロビーに立っていた。
時計をチラツとながめたちょうどその時、更紗達がタクシーから
降りた。

「……」

更紗の姿を見て、父は声も出なかった。

真っ白に、うつすらと浮かび上がる花びらの描かれた浴衣。
きちんと結われた髪。

ゆったりと、芳春の手をひいて、降りてくる。

玄関をくぐる。

一歩、一歩、近づいてくる。

そして、更紗は目の前にいる。

「あっ……」

何かを言おうとしたが、どうしても言葉にならなかった。

きれいだと言うのは、妻に対して気が引けた。

妻に似ていると言うのも、何となく気が引けた。

なにしろ、まるで、妻がそこにいるかのようなのであるのだから。

「いきませんか？」

花の咲いたような笑顔。

そこからは、まるで夢の世界に入ってしまったようだった。

妻も最初は、こんな感じだった。

美しくて、大輪の咲いた花のようだ、と言うのが初めての印象だ
った。

けっしてつんでしまっではいけないが、いつまでも側に置いてお
きたいような一輪の花。

だが、話してみると、そんなことはなかった。

祖父に虐げられてきた半生を正直に話すと、彼女はいきなり背中にまわり、背中を足で蹴って私をよるめかせ、こう言ったのだ。

「これで、あなたの意志でもなく、ましてやお祖父様の意志でもない、初めての一步がふめたでしょ？」

あまりに驚いて、私は自分の新しい一步をずっと見てしまったことを憶えている。

あの人は、いろいろなことがあったけれど、強かった。

生きていくための強さではなく、たくさんのお愛情を吸収して、ちよつとやさつとではへこたれなくなった強さだった。

ほんの二年だけ。知り合ってから、芳春を産むまでの二年を、忘れることはできない。

外は賑やかだった。

どん、どん、どん、と軽快なはやし太鼓の音。

露店の呼び声。

すれ違つ、街の人々の声。

その中を、更紗と二人でねり歩く。

芳春と舞姫と萌葱は、露店をあまねく探索していた。

例えば、綿菓子屋の前で芳春が、

「買いませんか？」

と言うと、

「お金のムダ遣いよ」

と舞姫のすげない答え。

芳春が目に見えてしょぼん……としてしまうと、舞姫はあわてて、

「わっ、解ったわ。買いましょう」

と言う。

本当はけっこう美味しいと思っているくせに、恥ずかしそうに綿菓子をほおばる。

父は、そんな息子達の様子をじつと見つめていた。

こんなありふれた光景を、そういえば味わったことがなかった。子どもの時から、そして結婚した後も。

一度だけ、結婚する前に妻とこの祭に来たことがある。

あの時も、ただこうして二人で何も話さずにゆつくりと人混みの中を歩き続けた。

賑やかな雑踏。隣に彼女がいるだけで、寂しくも何もなかった。

二人で何もしないで歩いていることが、ごくごく当然なことのよ
うに、言葉もなく二人で歩き続けた。

あの時は、ただ一つ金魚すくいの店にだけ立ち寄った。とにかく
お金がなくて、本当に金魚を一回すくうだけのお金しか持っていな
かったせいもある。

そして、一匹の赤い金魚をすくい、彼女にあげた。

お金がなかったせいもあって、結婚指輪以外に彼女にあげた最初
で最後のプレゼントが、その赤い金魚だった。

小さくて、すぐにでも死んでしまいそうだったけど、それでも三
ヶ月生きていたと、彼女は悲しそうに笑った。

私からもらった初めてのプレゼントだったのに、とつけ加えて。
いま、目の前にいる三人は、全ての露店に顔をつっこんでいた。
今度は萌葱が射的露店に入り、二人の首ねっこをひつつかんで引
き込み、三人で銃をにぎり、置物やらライターやらを必死にねらっ
ている。

長身の萌葱が手を伸ばすと獲物のすぐ前まで銃身がいくが、舞姫
がジト目でみるので素直に元の姿勢で撃つ。

立て続けに2個、3個落とすあたりはほとんど名人芸の域だった。
思わず露店のおじさんが、呻いてしまったほどである。

「萌葱ちゃん、相変わらず上手いねえ。商売あがったりだよ」

細い腕を曲げ誇らしげにガッツポーズをとると、獲得した人形を
舞姫と芳春にわたし、もう一つはおじさんに返した。

萌葱らしい一場面だった。

林檎飴、焼きそば、トウモロコシ、お面、玩具屋、タイ焼き、風船、和投げ、占い、大道芸人……。

もはや、舞姫と芳春と萌葱の手に余地はなかった。

舞姫も、片意地をはるのをすっかりあきらめて、年相応に無邪気に楽しんでいた。

芳春は、舞姫と遊ぶのが楽しそうで、始終笑っていた。

萌葱は、露店のおじさんとほとんど知り合いらしく、店の先々で声をかけられていた。

そして、風船釣り、その横に金魚すくいがあった。

世話をしなくてはいけない金魚すくいを通りこし、賢明な子供達は風船釣りの方に流れた。

「金魚すくいか」

もはや、懐かしい。

思いにふけるその前を、ついつと更紗が通った。

「金魚すくい、やりましょ！」

驚く間もなく、腕をつかまれ金魚すくいの前に座っていた。

あの頃は百円だったが、今はひとり二百円もはらうと、あの白い紙の張られたわっかをくれた。

最初はスーツ姿のおじさんがこんな所に座っていることに、何となく違和感を感じて、ただただ手に持つ白い輪をながめた。

横を見ると、真剣な表情で、更紗が金魚をにらみつけている。

やっぱり、その姿は大輪の花だった。

水面近くまで、白い輪を持っていく。

そして、先だけを使つてすいっと水面をくぐらせる。

だが、金魚はぴよんとはねて失敗してしまい、白い輪は上半分をなくした。

「悔しい……」

真剣な表情でそう呟く。

今度は、下半分を使おうと、もう一度水面近くに輪を戻す。だいぶ、間があく。

もう、更紗しか見えなかった。

全ての音が遠くへ、遠くへ流れていく。

「えいっ！」

飛び跳ねる金魚。

鮮やかなきらめきを宙に残し、そして、碗の中へ入った。

「やったあ！」

その声とともに、周りの喧噪が戻ってきた。

はしゃぐ更紗。

自分も何気なく挑戦してみたが、わっかはあっけなく破れてしまった。

そうだ、あの時は彼女ぐらい一生懸命やったはずだ。

小さなビニールの袋に、赤い金魚を入れてもらうと、私にも店の親父が一匹わけてくれた。

お互い一匹ずつ。あの時は、私が一匹だけだった。

二人で立ち上がると、自然と目があった。

更紗は笑っている。

大輪の花の、妻の顔で。

「はいっ！」

金魚の泳ぐ透明な袋を差し出し、そして、こう言ったのだった。

「やっと、お返しができたわ」

胸が熱くなった。

何も言わず、ただ袋を受け取る。

「あらっ、芳春」

気づくと横に芳春が立っていた。

かがみ込み、しっかりと芳春を『抱きかかえる』。

花火が打ち上がる。

祭が終わりをつげる。

あの、プロポーズをした瞬間。

花火の音に一度、かき消されてしまったプロポーズの言葉。
あの時の全てが、脳裏によぎる。

夢見た、芳春と妻との幸せな姿が、目の前にあった。

涙が、こぼれ落ちる。

目の前が、かすんできた。

すべてが、ぼやけゆく。

そして、そして、花火が打ち上がる。

「ちょっと、出かけてくる」

「どちらにですか？ 珍しいですね」

いつもの部屋から出てきた支配人に、思わず女性秘書が声をかけてしまった。なにしろ私用で出かけてくることなど、今まではず無かったのだから。

支配人はいたって表情をかえず、すらりと言うってのけた。

「うん、月に一度は息子に会っておくにしたんだ。顔を忘れてもらわないためにね」

珍しい光景だった。あの祭から、少しだけ変わったような気が、秘書はした。何と言っても、こんな冗談めいたことを言える人ではなかった。

「……どうぞごゆっくり行つてらして下さい」

心から出た言葉だった。

夏の日差しも強く、昼過ぎは、蝉の声もうるさいほどだった。

更紗も舞姫も萌葱も、そして芳春も、櫂の大きな影の下に寝転がっていた。静かな風に身を揺らされながら、心地よい眠りにひたっている。

そして、遠くの、この庭を見渡せる道路から、父が車から降りる。
今日は、何を芳春に話そうかと考えながら。

親父の考えていたのは、こんなことなのかも知れないと思いつながら……。

風が、優しく、そんな人達に吹きかけていた。

月夜の晩の、そんなお話。

其之参 「差別」

夏の夕暮れ前。

青い、ただ青い空。

暖かい空気が肌にぴったりと馴染む。

そんな空気が、ちよつと暑いけど、肌に心地よくて、

むせるような大気の中を、萌葱は歩いていた。

右には車の排気音。

左には蝉の鳴き声。

空には月。

もうすぐ夕暮れが、街をおおう時。

萌葱>モエギくは、大会の会場から帰路についているところだった。

その周りには、剣道部の仲間達あわせて6名が仲良く連れ添い、今日あった出来事を楽しく笑いあっていた。

萌葱が1年生にして女子優勝。他のみんなも少しずつ賞をいただいたりして、嬉しそうな笑顔は夏よりも明るい。

みんな片手に防具をかつぎ、もう一方には竹刀を持っているのに、制服につつまれた体が浮きそうなくらい軽い足どりで歩いていた。

萌葱達の住む街は海と山に囲まれる元漁村で、大会のあったこの都会から電車で1時間ほどのところにある。公園をつつきりば、もうそこは駅。みんなの足どりは、知らず知らず早くなってきていた。その駅前の、とある小さな公園に足を踏み入れた時の出来事である。

「あら？」

先頭を歩いていた女子主将の水上>ミナカミくが、公園の片隅に

視線を向けた。

「どうしたの？」

すぐ側にいた女の子が聞く。

「ほら」

水上の視線の先には、中学生ぐらいの少年が二人いて、浮浪者に石を投げつけていた。

「いやね」

水上は、きつい感じの眉をしかめた。

浮浪者に石を投げるなんて信じられない。

駆け出して、今すぐ止めに入りたいのに、でも、体はまったく動かなかった。

剣道部の女子主将をやっているだけあって、水上は人より気が強いし、正義感も強い。

でも、体は動かない。

親がそう教えている。

関わっては駄目、と。

だから、相手は子供なのに、体が恐がってしまう。

でもいつだって、そんな時は、後悔と自責の念がわき起こる。

その重たい思いに気づきながら、それでも自分では何もできないのだとあきらめてしまっしかなかった。

それは弱いことではないのだと、心に言い聞かせながら。

一人、萌葱は飛び出していった。

「萌葱っ！」

防具を放りなげ、猫のように軽やかに少年達に駆け寄っていく。

砂場を駆け抜け、少年達に気づかれる前に二人を両手で抱き上げると、そのまま前進して浮浪者の前にぺたりと座った。

「また始まった」

水上は、安堵のため息をついた。

本当に、心からホッとした。

『有り難う、萌葱。私たちにできないことを代わりにやってくれ

て』、と本当は呟きたかったが、恥ずかしくて口には出せそうにはなかった。

こんなプライドなんか捨ててしまえばいいのに、と思いながら。水上さん、ごめん！ 先に行つてて！」

萌葱が振り返つて叫ぶと、水上は強く頷いた。

いつものことなのだから。

「みんな、行くよっ！」

「萌葱さあん、気をつけてっ！」

水上が言つと、みんなも明るいもので、声だけかけて駅に向かった。

ただ、一人の青年だけは歩き出さなかった。それを誰も不思議に思わず、ちよつとだけ含んだような笑いをして、公園を出ていった。その青年は成瀬>ナルセくと言う、均整のとれた体格をしていて顔も決して悪くない。剣道の経験はほとんどないがなかなか練習熱心で、部員からの評判もいい。そして、萌葱の大ファンだった。

今までバスケットをやっていたのに、わざわざ剣道部に入りなおしたこの青年は、萌葱が「崖から飛び込め」と言えば間違いなく飛び込むだろうと、部員達は思っていた。それほど、彼は萌葱に心酔している。

もちろん、萌葱はそんなことを言いはしないが。

成瀬は少しずつ萌葱の方に歩いて行き、近くの木にもたれかかった。

実は、成瀬は何かがあつたときの用心棒として残つたつもりだった。

そんな必要はぜんぜん無いのだが、あの天使のような萌葱の笑顔を思い出す度に成瀬は不安で不安で、萌葱を一人にさせるなんて言うことは絶対にできないのである。

あの笑顔が曇ったり、体に少しでも傷がつこうものなら、萌葱が焦って止めに入ったとしても、相手を半殺しにしてしまいそうで恐い。

ああ、可愛い娘を持つ父親はこんな気持ちなのだろう、と成瀬は思わずにはいられない。

その萌葱は、逃げだそうとする両わきの少年達をしっかりと抱きしめ、いまだ恐怖に顔をそむける浮浪者を見つめていた。

「はなせつ、はなせよう！」

少年達は力の限り抜け出そうとしているようだが、あの細い腕のどこにそんな力があるのか知らないが、いっこうに抜け出せる気配はなかった。

そして、あきらめたのか、二人は静かになった。ただ、ぶすくれている。

そうなってようやく、浮浪者がおそろおそろ振り返った。

「う……………」

目の前には美しい女性が一人、まっすぐに自分を見つめていた。

そして、両わきには石を投げた少年達がいる。

あたりが、しんつ……と静かになる。遠くで、ぷわぁん、と鳴る車の警笛だけが静かに響きわたった。

今まで真剣な表情で浮浪者を見つめていた萌葱は少しずつ、少しずついつもの元気な笑顔になっていった。

まるで、そこから優しい風が吹いてきているような笑顔……成瀬は思わず、この笑顔なんだよな、と心の中で呟いた。

浮浪者も頭の中を真っ白にして、萌葱を見つめ続けてしまっていた。

「初めまして。僕、神無月萌葱と言います。おじさん、名前は？」

萌葱の第一声は静かな響きを伴っていて、時間はかかったもののそれほど戸惑いもせず、浮浪者は返答をすることができた。

「加藤、柴三郎」

「加藤さん、なんでこんな所にいるの？」

浮浪者は、思わず首をかしげた。この美しい少女は何が知りたいのだろう？

薄汚れた衣服とぼさぼさの髪をしていて、こうして駅前公園に

いるならば、だいたい想像はついているだろうに。

「夜になるまで、寝てようかと思つたのじゃが」

「失礼ですけど、お仕事は」

「ずいぶん昔からしとらん」

「よかつたら、理由を聞かせてくれませんか？ この子達に」

萌葱のいつた意味を、成瀬は理解できた。たぶん、この浮浪者も大きな世界を背負つたひとりの人間であることを、萌葱は少年達に理解して欲しいのだと思う。

子供の頃は大人はまったくの他人のような気がして、相手がもしかして会社で非常に辛い思いをしているかも知れないというのに、彼の愛車に平気で傷をつけたり、家事に忙しいときに呼び鈴を鳴らして逃げたり、なんの悪気もなく数々の悪事を働いてしまう。

そういえば、自分も小さいときはずいぶんと悪さをしたものだ、と木にもたれながら成瀬はうんうんと思わず感慨にふけてしまった。

浮浪者の加藤さんも、思考ではなく感覚でそのことに気づいた。

「息子がのう、人を殺して、会社がつぶれて、一家離散したからじや」

加藤さんは、すらつとそう言つてのけた。

軽くいわれたその言葉にあたりは圧倒されて、静かになってしまった。

「それで、もう仕事をする気になれん」

「辛くないですか？」

「辛い、もうあまり辛い」

ベンチによつこらせと座つた浮浪者は、思ひだしたようにベンチの下からお酒を取りだした。

「変わったお嬢さんや。こういう話は、やっぱり飲みながらせにやあな」

「いただきます。まだ未成年だけど」

両わきの少年達は自由になつたがすっかり神妙な面もちで、立ち

上がろうともしない。

萌葱はそのきれいな手で、シミや亀裂の入った湯呑みを受け取り、何かもしらぬ酒を受けた。

浮浪者がじかに一息飲むと、萌葱も湯呑みを一気に飲み干した。

「はぁ……」

「嬢ちゃん、なかなかいける口だねえ」

浮浪者は嬉しそうに笑った。

あはは、と萌葱は笑ったが、しばらくすると神妙な顔つきになった。

「どうしたのじゃ」

「加藤さん、どうして人は人をいじめたりするのか」

「それはまた、難しいことを考えるのお」

浮浪者はふたたび萌葱の湯呑みにつき、自分の胃にもそそいだ。

周りは、夕暮れになりつつあった。

蝉の鳴き声も、どこか遠くに聞こえる。

「お嬢ちゃん、人をいじめたことはないのかい？」

「ないと思う」

「心正しいね」

ふーむ、と考えるように浮浪者は髭に手を当てた。

「例えば、自分より優れている奴があらわれて、恐くなっていじめたりするとか」

自分の子分のように思っていた人間が、実は自分よりも優れていると思ったときの、恥ずかしさ、屈辱感。

例えばこの少年達のように、汚い浮浪者が自分の近くにいることが「恐くて」、石を投げたり。

「自分よりも優れていたら」

萌葱は盛大に拍手をした。嬉しそうに。

浮浪者は、眉をひそめた。

「心からかい？」

「心から」

「本当に？」

萌葱はしばらく、黙って考え直してみた。

普通、自分より優れている人を、心から本当に賞賛することはできない。そして、そのせいで、心が痛むときがある。

ただ萌葱は、

「僕の得意なものより優れていたら凄いいことだし、苦手なものはとことん苦手だから、できる人を尊敬しようし」

と答えた。

そういえばそうだ、と成瀬はうなずいた。

萌葱に武道で勝つということは心から賞賛に値するはずであるし、竹刀を持たせると一級品のくせに包丁を持たせると手を絆創膏だらけにしてくる。

ついでに、ネズミも死ぬほど苦手だ。

それは、それでいいのだ。一人の人間がすべてに優れていなくてもいいのだし、一番でなくてもいいのだから。

だが浮浪者は信じられないと言った様子で、質問はだんだんときつい調子になっていった。

「お嬢ちゃん、例えばあんたがね、お金を持っている以外になんの魅力もない人間だったとする。お金があるうちは、いろいろな人があんたを必要とするが、そのお金が無くなったとき、あんたは手放しにお金がある人のことを賞賛できるんかい？」

唾を飛ばしながら、浮浪者は真剣だった。

萌葱は何も言えなかった。

今の言葉はたぶん、彼自身のことだろう。

そして彼と同じ場面になったとき、違う行動がとれる自信はほとんどなかった。

「……………できないと思う」

浮浪者は「ほらごらん」とでもいいたげに微笑み、酒を飲んだ。

萌葱も成瀬も少年達も、声がでなかった。

静かに、この浮浪者を見つめるしかなかった。

くいつと酒を飲み干す。ふたたび見た浮浪者の顔は、しかし、もはや満足気な表情はどこにもなかった。

静かな、少し遠くを見るような表情。

萌葱の胸が少しいたんだ。

「だれだつて『差別』はするもんじゃ。自分が無価値であることを確認することが恐いからの」

浮浪者は手に持った一升瓶を月に向かってかかげ、ちょっと大きな声で滔々と話はじめた。

「会社でも家でも、自分がさも偉いように振る舞わないと、周りが自分のことを無価値な人間だと言い出しそうになるように思えることがある。いつか、それがばれることは解つていても、それでも相手が駄目な人間だと思わずにはいられなかったりする時が、大人にはあるんじゃない」

本当に無価値な人間なんていないと解つていても、それが自分のこととなると不安でしかたがなくなる。

ほんの少しでも、価値のある人間であることを他人に見せて、そして前以上に自分が無価値であることを恐れてしまったりする。

成瀬はふと萌葱を見た。

浮浪者の言葉に真剣に耳を傾けている、美しい萌葱。

どうして彼女は、違ふのだろう。

全身を火傷して体中が動かなくなり、あの美しい容姿がなくなつたとしても、優しく頭を撫でてくれる人がいることを、萌葱はなぜか無意識で知っている。

だから、彼女は心から純粹でいられる、のだと思う。

自分一人の強さではない、強さを持つて。

「わしは息子が恐かった。言うことは聞かない、勉強はできない、暴力を加える。だから、遠ざけとつた。しょうがない奴だと思つていた。だが息子は、体をはつてわしに訴えかけていただけなんじゃ。しょうがないのは、それに気づこうとしなかった鈍感なわしだった」
浮浪者の顔は、むしろ悲しいほどまでに、笑つていた。

自虐的な笑い。

でも、優しい笑顔。

「あんた達は、わしのようになるんじゃないよ」

萌葱は立ち上がり、ゆつくりと歩いて浮浪者の後ろにまわった。

そして、その細いきれいな腕を浮浪者の首に回した。いくぶん、きつめに。

「自分をいじめる人は嫌いだ」

浮浪者のかき乱れた髪の中で、萌葱が呟いた。

相手をいとおしいと思ったとき、萌葱はこうやって首ねっこを抱きしめてしまう。本当は体を抱きしめたいけど、そうもいなくて、こうして首にまわりつく。

ある日の学校での出来事。ある大人しい女の子が、自分が馬鹿にされているのに、それを一緒になって笑っていた。

その女の子が「私、馬鹿だから」と言って笑ったとき、萌葱はついうしろから抱きついて、真剣に「自分で自分をいじめないで」と言ってしまった。

自分をいじめる姿が、いじらしくて、健気で。つい、抱きしめずにはいられなかった。

女の子はしばらく笑っていたが、首にまわる萌葱の手を取ると、涙をこぼした。

浮浪者の目からは涙は落ちなかったが、その表情から自虐さは消え、本当の笑顔になった。

その汚い手で、ぐしゃぐしゃと萌葱の頭をなでる。

「あんた、いい子じゃ」

浮浪者は萌葱の手を取ると、もといた場所に座らせた。

萌葱の方がむしろ泣き出しそうで、横にいた少年達を最初の時のように脇に抱きしめた。

「あんたみたいな娘がいたら、わしも少しは素直になったかもしれ

んなあ」

公園は夕に染まっていた。

まだまだ青さを残す空に、青白い月が光っていた。

駅から来た幾人かが、不思議そうに見て、通り過ぎていく。

その頃になつてやっと、気持ちがちが落ちてきたらしい――少年

年の一人が、抱きかかえる萌葱の顔を見た。

萌葱が、何かな、と見つめかえすと、少年は顔を真っ赤にした。

見つめられて、急に恥ずかしくなったらしい。

「はなさんか」

萌葱はちよつと嬉しそうに、力を強めた。

「やだよ」

萌葱の胸元でもかく少年は、にたりと笑つて、

「姉ちゃん、胸、でかいな！」

と言つた。

萌葱が恥ずかしがつて手をはなすかと思つたが、むしろ手の力は

強まつた。

「いいだろお」

萌葱はそう答えたが、何がどういいのか理解に苦しんだ。

ただ成瀬だけが、抱きかかえられる少年達を見て「いいなあ」と

心の中で呟いていたことは、誰も知らない。

烏が、悲しげな鳴き声をあげていた。

自分はなぜ萌葱のように生きられないのだろう。

萌葱のように勇気が出せないのだろう。

やっと駅について、帰りのキップを買いながら、成瀬は繰り返し

呟いてしまった。

萌葱はもう、いつもの笑顔を取り戻し、美しげな横顔を見せていた。

ふと何かに気づいたように、萌葱は視線を移動した。

そして軽やかに歩いていく。

「おばあちゃん、どうしたの？」

「うん？ ああ、どうも目が悪くてね。いくらか、わからなくて」

「何処まで？」

「白石ちゅう所なんだが」

「あつ、隣町！ …… 1560円だよ」

「有り難う、お嬢ちゃん」

萌葱は、にっこりと笑った。

『有り難う』、この言葉を言われたはいつのことだったか。

萌葱は今日だけで何回言われたか。

おばあちゃんの手を取り一緒にホームに向かう萌葱の後ろ姿を見て、あの水上のような「しょうがないな」とでもいったげな温かなため息をつきながら、成瀬はゆっくりと後を追っていた。

カタン、カタン、コトン……

列車は走っていく。

暗闇に、家の明かりを流れ星に変えながら。

人もだいぶ少なくなり、車両の中には遠くに二人と向かいに座るあのおばあちゃん、そして隣に座る萌葱だけとなっていた。

窓の外を見ると、ただ一つ、満ちかけた月がこの列車を追っかけていた。

真つ白な月。兎が餅でもついているかも知れない。

萌葱はしばらく黙っていた。

それまでは大会の話で盛り上がっていたのだが、話もつきると自然に話は途切れた。

昔はこの沈黙が辛くて、なんとか話を作りだそうとしたものだが、最近はその心配もしなくなった。萌葱にいらぬ気遣いをしてもしようがないのだから。

眠たくなるような、窓からもれる風を感じながら、しばらくこの幸せな沈黙を感じていたいぐらいだった。

「なんで人って、人をいじめたりするのかな」

萌葱の言葉は突然だったが、不自然さは何もなかった。

「いじめられる方も、いじめる方も苦しむのにね」

本当だね。

何故なんだろう。

萌葱と一緒にいると、それが不思議になる。

本当は、解っているのに。

どちらも止められない、どうしようもない何かを誰もが持っているせいのな。

不思議だ。何故、人は自分を苦しめるのだろうか。

どれだけ人に、有り難うと言えるだろう。

どれだけ人に、有り難うと言われるだろう。

人はなんで人をいじめるのかな。

成瀬の見る光景は、少しずつ色合いを増してきているように思えた。

カタン、カタン、コトン

静かな、リズムを持った音。

昔、『銀河鉄道の夜』を読んで聞かされたとき、列車は永遠にどこまでも行くものだった。

地球の果てまで走っていった、いつかは宇宙まで飛び出して行くのだと、信じて疑わなかった。

目の前に広がる光景は、闇と月と山だけ。

月だけが、こちらを見つめるように、動かないでそこにいる。どうして、月は動かないのだろう。

理屈は知っているのに、月が追っかけてきているからと言われ

ば、正直にうなずける。

月夜の晩は、人の気持ちを優しくしてくれるような気がした。

コトリ……………

ふいに肩に重さが加ると、成瀬は今までの落ちつきをすっかりなくしてしまった。

眠ってしまった萌葱が、抛り所をなくした頭を成瀬の肩にもたれさせてしまったらしく、肩のうえで安らかな寝息をたてていたのだ。柔らかな髪が頬をくすぐり、石鹸のほのかな香りが鼻にとどく。

目に映えるような服の白さと、薄い小麦の肌。

一気に激しくなってきた胸の鼓動とは反対に、萌葱の服は何事もなかったように静かに揺れていた。

ちよつとでも力を入れればくずれそうな小さな頭を左肩に感じながら、自由な右手で思わずぎゅっと握り拳をにぎりしめ、成瀬は心の中でおもいきり叫んでしまった。

『超らっきいいいいつつつつつ！！』

向かい側ではあのおばあちゃんが、くすくすと、二人を見て笑っていた。

夜の10時。

風呂上がりの更紗は、いつものように台所でテレビを見ていた。頭の上にバスタオルをのせ、冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、ぷしゅっとプルトップを引き上げる。それをつまそうに飲むと、「ふはあっ」と息をはいた。

相変わらず、見かけよりもおばんくさい更紗であった。

ビールの缶を持ちながら、テレビの前の机に腰をおろす。

台所は、夕食を食べ終えてゆっくりと牛乳を飲む萌葱と、片付けをする舞姫と、その手伝いをする芳春がいて、いつもは暗く落ちついた台所が明るく和やかだった。

『東南アジア系の3人組が昨夜、下校中の女子高生から現金1万5千円を奪いとり。そのまま逃走しました』

意図的に無機質によまれるニュースが、台所に流れていった。

そういえば最近は本当に外国人労働者が増えてきた。そしてそれに伴って、日本人の外人コンプレックスはいよいよ目立ってきているような気が、更紗はした。

日本語を話せない、外国人労働者はそれだけでほとんど身体障害者と同じ扱いの就職しかできないこの現実、なんとかならないのだろうか。

「外人さん、お金に困ってるね。就職の門戸が狭いせいよ、まったく」

更紗がぶつくさと文句をいい始めた。

「更紗、そう言う文句は、本当に自分が雇ってからいいなさい」

舞姫の言葉に、更紗は少し眉をしかめた。

「厳しいなあ」

「弱者から見ただけでなく、ちゃんと強者からも見てやらないと論理は中途半端になる。そう教えてくれたのは、更紗よ」

「うつ……………」

この幼い舞姫にいつ教えたのだらう、と更紗は思わず考えてしまった。

『外国人の被害はこれまでに何度かあったものの、外国人による日本人への被害は初めてで、警察では厳重に警戒するよう住民に呼びかけました』

辺りが静かになった。

なぜ、苦しく数の少ない外国人の被害の方が、ずっと多いのだ？

「ちよつと違うんじゃない？」

更紗の呟きに、舞姫は返答しなかった。

つまり、反論の余地があまり見いだせなかったのだ。

「この前の小錦の横綱の話もそうよ。委員会さんの話は解らないでもないけど、それに対する国民の意識は頷けない。どうして、本音で言えば外人を横綱にしたくないが半数以上もいるの？」

「今までずっと日本人だったもの。急に変わることは、誰だって抵抗があるわ」

「それにしても、外国のものは好んでどんどん中にいれるのね」

舞姫はまた黙ってしまった。

「アメフトを日本でやっても何も思われないのに、相撲がアメリカで行われることは良くは思わないわけ？ 別に、こんな考え方が絶対に正しいとは思わないけど、いらない『困い』で人を傷つけないで欲しいなあ」

幼い芳春には高度すぎて、話のほとんどは理解できなかった。そしてむしろ、外国でおこなっている相撲を想像して非常な違和感を感じていた。

更紗はくりりと振り返り、萌葱の方を向いた。

「ねえ、萌葱はどう思う？」

「僕？」

萌葱はお気に入り、白い雲の浮かぶ透明なグラスを両手で持ちながら、ふと目を閉じた。

萌葱の頭の中には、あの少年達と浮浪者の姿が浮かんでいた。

誰もが弱くて、誰かを傷つけなくてはやっていけないくて、

辛くて、

自分を傷つける。

悪いことを誰も叱ってくれないから、

自分で自分を叱るように自分を傷つける。

それがあまりにも純粹で、健気で、

「……みんな、大好きだよ」

心から、そう思う。

更紗は、呆れたように両手をあげた。

「萌葱には負けるわ」

「更紗もあれぐらいの純粹さがあればね」

「いーだ。これぐらいひねてないと、舞姫の姉ができないもんでね」

「あら、萌葱も私の姉よ。自分のことは、ちゃんと自分に責任を持ちなさい」

どうしても、舞姫に勝てない更紗であった。

ある街の、ある駅前公園。

夕暮れになって、くっきりと月が浮かびあがってきていた。

青白い空にくっきりと白い輪郭が、まるで額縁のように月を飾りたてている。

そんな月を見つめながら加藤さんは、真っ白になっていく心を感じていた。

心が真っ白になっていく。

水面にうつる、月のように。

ふと、すぐ近くに人が立っていることに気づいて、加藤さんはふと視線を上げた。

そこには、あの少年達が立っていた。

「……………」

あの時のような恐怖を、加藤さんは不思議と感ずることはなかった。

月の白さが、心を覆い尽くしていたせいかも知れない。

それとも、あの少年っぽい娘のためかも知れない。

少年達がぺこりと頭を下げた。

そして方向をかえて、家路に向かって帰っていった。

不思議な安堵感が体を満たしていく。

加藤さんは、いつものベンチにゆっくりと体を寝かせていった。
久しぶりに、落ちついた寢床を見つけた気持ちがしていた。

月夜の晩の、そんな話。

其之四 「小さな冒険」

夏休みに入って間もないとある夕方。

食事の後片づけもおわり、自室の部屋に戻り机についた舞姫>マ
イヒメ<は、学校に体操着を忘れていることに気がついた。

「いけない。早くとってきて洗濯しなくちゃ」

滅多なことでは失敗をしない舞姫だが、この程度の忘れ物をときどきしてしまう。自分の頭をぽかんと叩くと、すぐに気を取り戻して部屋をでた。思い立ったら行動するあたりは神無月家の特徴のようで、そのまま舞姫は階段をとっととおりていく。玄関につくと靴をはき紐をきゅつと縛った。

「あれ？ 舞姫さん、お出かけですか？」

舞姫にこんな律儀な敬語をつかう住人は、つい最近この家に居候することになった芳春>ヨシハル<しかない。テレビを見ていたようで、台所から萌葱>モエギ<と一緒にひよっこり顔を出していた。

「あつ、うん。学校に忘れ物してきちゃった。取ってくる」

「今からですか？ もう、暗くなりますよ」

夏とはいえ、もう闇があたりを覆う時間になっていたが、靴をはき終えた舞姫はすつくと立ち上がると首を横にふった。

「この街で私を襲う人はいないわ」

姉の萌葱がうんうんと首を縦にふる。舞姫自身の要因も含め、姉妹、知り合いの要因も含め、舞姫に手を出せる人はそうはいない。

そういえば以前、母親と一緒に買い物をした帰りに、その財布をバックごと盗んだ人がいたが、横にいた舞姫が持っていた大根を相手の頭に投げつけて捕まえ、4才にして警察官に褒められたことがあった。「物をぶつけて褒められたのは、あれが生まれて初めてね」と、後になって舞姫は言ったものである。

「それに、まだそんなに遅くないわ。いつてきますっ！」

短いきれいな髪をさらつとなびかせて、舞姫は飛び出していった。
「あつ、僕もいきます」

ついでが動いてしまう芳春を見て、萌葱は嬉しそうはやしたてた。

「二人でいつてらっしゃあい！ 遅くなってもいいわよお！」

「うるさいわね！ 萌葱っ！」

「萌葱さん、いつてきます」

「気をつけてね」

萌葱に見送られながら、二人は夏の夕闇の中へ飛び出した。

この街は、少し変わっている。

見た目にはほとんど他の街と変わらないのだが、ときおり不思議なことが起こる。座敷童子や河童を子供が見たと言うと、「小さい頃は、見えるものよ」と親が答えるような、そんな不思議なことがそこらに転がっている。占い、祈禱師、お祓い、神社、巫などが多いのはその副産物みたいなもので、神無月家も古くからある名家だった。

夜が近くなり、街が青一色に染まる時。外の大気は、まだ体の中から暑くするような熱気を含んだ中、舞姫と芳春はすぐ近い学校までの道を、二人つきりで歩いていった。

「舞姫さんは、更紗>サラサくさんのように何かできるのですか？」

芳春は、神無月家三姉妹の長女の名を出した。以前、この人に母親を降霊してもらったことがあった。

「あの時みたいなの？」

「はい」

「基本的にああいうことができるのは、更紗だけ」

ちらつと流し目をする舞姫の顔は、笑っていた。その美しい笑顔が自分に向けられたものかと思うと、芳春はちよつと嬉しくなった。
「でも、偉大な守護霊のついている萌葱とは違って、私はちよつと

だけ護身術程度のものは教えてもらっているけど、使ったことがないわ」

「そうなんですか？」

「だって、そんな術が必要だったこと、芳春君はある？」

自分の名前を初めて呼ばれてどきつとしたが、何もなかったように装う。

「ないですけど」

「私も同じよ。私だけ特別ではないわ」

芳春はふうんとうなずいた。

「更紗は特別だけだね」

相変わらず十分に皮肉が込められているようなので、芳春は少々方向を変えた。

「萌葱さんには、強い守護霊がついているのですか？」

「あの人は、霊にも好かれるのよ」

舞姫の表現は何となく萌葱にぴったりと合うような気がして、芳春はちょっとだけ笑った。

「ただ、あんまり強い霊が周りをおおっているから、萌葱は靈感っていうのがないの。更紗がいないと、幽霊とか見えないんだって」

「そうなんですか」

「でも、その方が幸せよね」

舞姫と話すと一つ一つが新鮮に聞こえて、芳春は思わず感心するように深くうなずいてしまう。そして舞姫はその姿を見て、微笑んだ。

夏の夜道は暖かくて、お湯の中を歩いているような不思議な浮遊感がある。銭湯に行った帰りに、まだお風呂の中に入っているようなあの温かい感じ。

蹴った石の音が、冬に比べて、まるで響きわたる。

ちよっと汗ばむくらいなのに、ふと駆け出したくなるようなアスファルトの道を、二人は笑いながら歩いていた。

いつも通っている学校はもう、目の前にあった。

ちょうどその頃、校舎の中でちよつと不思議な起きていた。

3階の廊下に、ゆらゆらと陽炎のように大きな「顔」が浮かんでいた。

大きさは、1mぐらい。

小学生ぐらいの大きさのただの「顔」は、髪の毛がほとんどなくて不要なほど目を大きく見開いていた。

口をむつと曲げ、浮かんだままゆつくりと廊下を渡っていく。それが自然なことにように、ゆつたりと。

正門は閉まっていたが、裏門の横にある教員用の小さな門は開いて、二人はその門をくぐって学校の中へ入った。

「実は、以前も入ったことがあるの」

「学校にですか？ 恐くなかったですか？」

「別に。でも、その時は萌葱がついてきてくれたけど」

学校はかなり静かだった。虫の鳴き声も聞こえない。ただ、ひとつの外灯が校舎の大きな壁を照らしだしていた。

舞姫にとっては芳春が横にいて、芳春にとっては横に舞姫がいる。大きな闇と静寂は心の中にわずかな不安を作りだすが、舞姫と芳春はそれよりも大きな安心感に包まれていた。

恐さを紛らわせるような口笛も吹かず、かといって沈黙してしまってもない。大きな静寂を壊さないように、二人は静かに語り合いつつ、校舎のあいだの小道を歩いていた。

大きなコンクリートの壁。そして、グラウンド。背の高い外灯が、二人の影を小さくまとめる。

視界の端に、ちよつと欠けた月がゆらゆらと、雲の中に身をまかせていた。

ウサギ小屋を曲がると、そこには大きな校舎が広がっていた。そ

の校舎の片隅には、開け放たれた扉があった。

「よかった。やっぱり開いてた」

二人はそうして、暗い校舎の中へ入った。不思議とどちらからともなく、声をださなくなった。

外よりも暗い闇も、目がなればそれほど困ることはなかった。入ったすぐの階段を2つ、3つ上がっていく。毎日歩いている階段は、夜はまた静かないつもと違った様子でそこにあった。

ちよっただけ息が上がりかけてきた3階で廊下へわたると、一本の長い道は窓からの月明かりで美しく浮かび上がっていた。

「……きれいな」

静かな一言はあたりにしんと広がり、心の中へとどいた。

そして、横を見る。舞姫の横顔をのほろがずっときれいだ、芳春は思った。

廊下を歩き、二つの目の教室に入る。舞姫の机は窓側の後ろの方の席だった。机の横にかけてある体操着のはいった袋を手にとり、ほっとしたように舞姫は抱きしめた。

月がかげつたのと、舞姫の動きが止まったように見えたのが、だいたい同じ時だった。

「舞姫さん？」

．．．．．ア．．．

様子がおかしかった。目がうつろで、何も見つめていなかった。そして、何かを唱えていた。

．．アーマア．．シャダ．．

芳春は見た。

教室のちょうど反対側の壁から、何かがとおり抜けてくるのを。

「顔」

ただの、大きな「顔」。

その「顔」が、口をかつぽりと開けた。

芳春の背中の毛が、立っていく。

こわい。

心臓がトクンつと音をたてた。

「顔」の大きな口のなかに歯のようなもの、唾液のようなものが見えたと思ったときには、すでに「顔」は凄いいきよいで向かってきた。

ぐん、ぐん、ぐん、と大きくなっていく。

そして、来た。

舞姫が振り返る。

「カンマンっ!!」

すごい風が、吹き荒れた。

あたりの席がいくつか跳ね上がり、芳春の服と髪がびゅっとはためいた。

「うっ っ っ っ っ っ ああ!!」

叫び声。

「顔」が粘土細工のようにへこんでいく。

そして、いくつかの塊となって飛び散った。

「芳春君、こっち!」

舞姫がぐんつと袖をひっぱる。

やっと意識を取り戻して、二人は教室から駆け出していった。

ぱた、ぱた、ぱた、ぱた、という足音と胸の、トクン、トクン、

という音が一致するほど走った。

さつきよりもずっと暗い廊下を、すべるように走り抜けていく。
廊下を突き当たり、階段をかけ降りていく。

転びそうでもどかしくて、二人で信じられないぐらい階段を飛び降りていく。

最後のおどり場をまわると、あの扉が当然のように閉まっていた。
かすかな不安。

扉をのぶをひねっても、押しても、引いても、ぶつかっても、扉は開かなかった。

「駄目、開かないっ！」

「鍵は?!」

「それが開いてるみたいなのっ！」

舞姫の一言がいいもいえぬ不安になり、芳春は泣き出したい気持ちになった。

それでも必死にこらえて、あたりを見渡した。

「窓っ！」

二人は急いですぐ近くの教室に入り込み、窓に駆け寄る。

芳春が、もどかしく鍵を回して開け、窓を開けようとするが、たてつけたようにピクリとも動かなかった。

「芳春君、どいてっ！」

振り返ると、舞姫が椅子をかがけて立っていた。

芳春が横にとびき、椅子が窓にぶちあたる。

「きゃっ！」

有り得ぬことだが、椅子の方がはね返り、ガラスは微動だにしていなかった。

「舞姫さんっ」

倒れこむ舞姫にかけより、抱き起こす。

「大丈夫。芳春君、おねがい、こちら辺の机をどけて……」

「うん、分かった」

座り込んだままの舞姫を中心に、芳春は必死に机をどかして

いく。

転がる机もあるが、気にせずどんどん外にはじき出していく。
舞姫はふらりと、立ち上がった。

瞳を閉じ、ふるえる手で自分の足元にゆっくりと円をかく。

「芳春君、来てっ！」

動かしかけの机をほっぴり、舞姫のもとにかえると、「もっと近寄って」といわれ触れあうぐらいに近寄った。

今まで見た中でいちばん真剣な表情で、何かを呟く舞姫。

その呪文が終わったかと思ったら、崩れるように床に座り込んだ。

「舞姫さん」

「……この円から出ないように座って」

どうしていいか分からなかったが、あきらめて、膝を触れあわせ
るぐらい近い位置に芳春は座った。

「この円の中にいれば、安全だから」

それを聞いて、少しだけ安心した。

心臓だけは信じられないぐらい早さで、トクトクトク、と音をた
てていたが、それがほんの少しずつ、もとの早さに戻っていく。

少しずつ、立っていた毛がもとに戻っていく。

でも、舞姫はさつきから下を向いていた。

「舞姫さん？」

舞姫はピクリとも、動かなかった。

「……舞姫さん？」

おそろおそろ手をのばして顔を触ろうとしたら、その手にぼたり
と何かが落ちた。

水……涙っ！！

「恐いの。こんなこと始めてだし、こういうときに限って更紗は仕
事でどっかいつてるし」

芳春はあわてふためいた。

舞姫さんが泣いている。それだけで、「顔」があらわれたとき以
上のパニックになってしまった。

どうしたらいいのかまったく分からないくせに、鼓動だけは信じられないくらい大きく早くなっていく。

「萌葱はいないし、お父さんもお母さんもないし、私ができるのはここまでだし。これがもう、精一杯なの。これ以上、何もできないの」

ぼたり、ぼたり、と涙が膝に落ちる。

芳春はさっきまで舞姫がどんな時でも強い人なのだと、思っていた。

そして今、やっぱり誰でも恐いのだと、気づいた。

舞姫は、特別な人でないことを、体で知った。

おそろおそろ、顔にふれた。

触った瞬間、ぴくつと舞姫の体がふるえる。

「舞姫さん……」

驚いた瞬間に、涙は止まった。

それでも、しばらくは相変わらず下を向いたままだった。

「そうね『舞姫』だものね。『姫』の名がつくからには、泣いては駄目よね」

一度、舞姫は顔をふると、はあーと深呼吸をする。

そして、ゆっくりと顔をあげる。

少しずつ見えてくる、顔。

眉、瞳、鼻、口。

涙に洗い流された顔はいつもよりもずっと真摯で、まるでせせらぎのように澄んで綺麗だった。

窓からの淡い光に映し出される、舞姫の姿。

芳春は、いままで味わったことのない、胸の苦しさを感じた。

そして、舞姫はにっこりと笑う。

極上の笑顔で。

あたりは、またあの静けさを取り戻していた。

なるで何事もなかったように。

月は相変わらず雲に隠れていて、うつすらとした光だけが机の転がった教室を照らしていた。

ついつと舞姫が床に書いてある円をなぞる。

「この円の中にいる限り、霊には見えないんだって」

舞姫はもう、すっかり落ちついていた。

声も、水のように穏やかで、澄みきっていた。

「力が続いてるばらくの間は安全。その間にきつと助けが来るはずだから」

「しばらくつて、どのくらいですか？」

「30分弱」

長いとも、短いともいえる。

「もし助けが来なかったら？」

舞姫の手が止まった。

芳春ははつとした。舞姫も不安なのだ。聞いてはいけないことだったのかも知れない。

舞姫は、振り返り、微笑んだ。

「分からない」

我慢した笑いなのはすぐにわかって、芳春は後悔した。

ぎゅつと握った舞姫の手が小刻みに震えているのを見ると、もう芳春は恐ろしい「顔」のことなどどこかにいつてしまった。

「えつ、えつと……僕、今まで幽霊つてあまり恐くなかったんです」

舞姫の震えがぴたつととまり、潤んだ瞳が芳春を見た。

少し色っぽくてドキツとしてしまったが、教壇の前で作文を発表する少年のように、一生懸命、続きを語りだした。

「怪談とか聞いても恐くなかったし、実際に見たこともなかったし。でも、一つだけ怖いものがあつたんです」

芳春が指を一本たてる。

舞姫が「……なに？」と聞いて、瞬きをしたとき、残りの涙が頬

を伝わった。

「えっと、ほら、指がチヨキをしている怪獣」

「もしかして、バルタン星人？」

最近、ウルトラマンも再放送していて、舞姫もその名前を知っていた。

でも、それにしても、バルタン星人とは。

それを聞いて、舞姫はやつと微笑んだ。

「はい、床屋で髪を切っている時に漫画で読んだんですけど、主人公の周りの人がすべてバルタン星人になっちゃうという話だったんです」

「すべての人が？」

「うん、八百屋のおじさんも、知り合いも、家族も」

「ふうーん」

「それで、なんか恐くなっちゃって。家にいたとき、暗闇からバルタン星人が出て来るんじゃないかって、すごく怖い日が何度かあったりしました」

舞姫がくすくすと笑いだして、芳春は飛び上がるように嬉しくなった。

ひとしきり笑うと、舞姫は「……もつと何か話して」と呟いた。優しい瞳。

幸せに包まれたような、優しい笑顔。

芳春は今度は自信を持って、話すことができるようになっていた。「むかし力が弱くて、持ったもの何でも落としちゃった頃があったんです。それで、アイスクリームを買ってもらったんですけど、そのまま落としちゃって。泣いて、泣いて、泣いたら、新しいのをまた買ってくれたんです」

「良かったじゃない」

「でも、また落としちゃって」

今度は、声をだして笑った。

教室がほんの少しだけ、明るくなったような気がした。

「舞姫さんは、何かないのですか？」

「私？」

うーん、と何か考える。

「私はあまり無いけど……お父さんとお母さんが神奈川の方に引っ越しちゃった時、私は更紗や萌葱と一緒に残ることに決めただけど、お母さんが心配しちゃってね」

静かに、静かに、舞姫は語った。

「料理の真似ごととか、洗濯をしたりして、『お母さん、私でもできるよ。心配しなくてもいいよ』って言ったんだけど、本当にいなくなったらすごく寂しくって」

芳春は真剣に聞いていた。

「何度も更紗に、『お母さんどこ？ お父さんどこ？』って聞いて、困らせたことがあったなあ」

髪をかき上げると、ちよつとだけ寂しそうな笑顔が見えた。

「いるときは分からなかったのに、いなくなって初めて今までそこにいたんだって気づいて。いるわけが無いって知っているのに、いろんな部屋を開けて調べちゃったりしたの」

「僕も、どの家にもお母さんがいるって知ったときは、どこかに隠れてるんじゃないかって探したときがありました」

「タンスの中とか？」

「ごみ箱の中とか」

舞姫はまた笑った。

「その時は真剣だったんですけど……」

うん、と舞姫はうなずいた。

二人の間だけで、なごんだ雰囲気 flowed。

振りむけば、静かに広がる教室があるというのに。この学校のどこかにいまだ、「顔」がいるというのに。

そう芳春が思ったとき、舞姫が抱きついてきた。鼓動が一気に跳ね上がる。

「まつ、舞姫さん」

「……来た」

説明はそれだけで十分だった。

思わず体中の筋肉がかたくなった。

あたりを見渡すが、そこは変わらず静かな教室だった。

違う。

床から、何かが出てきた。

ぎゅっと舞姫の体をつかむ。

ところどころが欠け、焼けただれた「顔」が、ぷかりと浮かんでいた。

すぐ目の前に。

芳春は目をつぶった。

恐い。

恐い！

舞姫をくだけるほど強く、抱きしめた。

息などしていないようなのに、すぐ耳元で聞こえるようだった。

たれる涎。

ぎらついた歯。

もとのままの片目。

目をつぶっていても、あともう1cmのところまで来ていることを、肌で感じる。

かっぽりと口をあけ、ほんの一口で飲み込んでしまう。

そう思っていたが、けっきょく何も起こらなかった。

永遠のような時がすぎ、気づいてみれば「顔」はいなかった。

もうそこは、静かなままの教室だった。

「もう大丈夫みたいです」

「うん……」

舞姫はそうっと、離れた。

それでも、二人はしばらく落ち込んだように口を閉ざした。早く、誰か助けにきて。

そうでないと、食べられてしまう。
残り時間は、ほんのわずかしかなかった。

「誰もこないわね」

芳春は何も言えなかった。

「もうすぐ、この円の効力もなくなるわ」

「はい」

「でも、最後まで頑張ってみるから、信じてね」

「何か手があるのですか？」

「他にもいくつか知ってる呪文があるから、それを唱えてみる。なにも効果がないと思うけど」

芳春は少し不安になったが、「顔」よりなにより、舞姫が泣いてしまうことの方が嫌だった。

「僕も頑張ってみます」

「うん」

舞姫はそう言って、何かを呟いた。

「4つ、かな思い出せるのは。この円が壊れる瞬間に合図するから、私から離れてね」

「はい」

舞姫が顔をあげた。

やっぱり、今にも泣き出しそうだったので、芳春はまた慌ててしまった。

「あつ、あの。たぶん呪文、効くと思います。それに、危ない時になったら、誰か助けに来てくれるかも知れませんし………ウルトラマンみたいに」

舞姫はぷつと吹きだした。

泣きながら、笑いながら。

ばたばたと涙をこぼすと、やっと落ちついて笑ってくれた。

芳春はほっと安心した。その時、舞姫が近寄ってきた。

これ以上近寄れないところまできて、そして、額にそつと唇が触れた。

温かな、柔らかな感触。

「有り難う」

とくん

一回だけの鼓動。

そして、今までいちばん強く、大きく、早く、鼓動が鳴り響いた。
「こわれたわ！」

もう恐いものは何もないっ！

芳春は舞姫から離れると、椅子の一つをつかんだ。
どこからか、叫び声が聞こえる。

二人を見つけたらしい。

風が吹いてくる。

廊下から。窓から。

叫び声が大きくなる。

すぐそこにいる。

廊下を。そして、すぐそこに。

来たっ！

舞姫が必死に、いくつかの呪文を唱える。

「顔」は一瞬ちゅうちよしたようだが、呪文が意味をなしていないことをすると、ゆっくりとさぐるように舞姫に近寄っていった。

まだ舞姫は、呪文を唱えていた。

かぱりと口が開く。

「顔っ！ こっちに来い！」

芳春の声に反応して、「顔」の瞳がぐるりとこちらを向いた。

そしてもう一度、舞姫を見つめる。

芳春を見る。

そして、芳春の方に向かってきた。

どうやら万が一、舞姫からさっきのようなものを受けるよりは、芳春の方がいいと思っただけらしい。

教室の反対側へ逃げた芳春は、もう一度、椅子を構える。

「顔」が再び口をかばりと開け、そして向かってきた。

芳春は必死にその口の中に椅子を投げ込み、横に逃げた。

ぐしゃっ

振り返ると、もうすぐそこに顔があった。

ぱっかり開けた口には、ひん曲がった椅子があった。

なす術はもうなかった。

食べられるっ！

その時、すべてが白く輝いた。

まばゆいばかりまでの光。

ほんの一瞬のできごと。

光が消えたとき、「顔」はもうどこにもいなかった。

二人はもたれ掛かるように寄り添いながら、家路についていた。外はもうまっくらで、今になってやっと月が明るく光っていた。歩いている人が見えたときは、嬉しくて涙が出そうだったけど、二人はただもう寄り添って歩くぐらいしかできなかった。

「最後に唱えたのは、どんな呪文だったんですか」

芳春は、これだけは聞いておきたいと思って、呟くように聞いた。

「最後のはね………霊を呼ぶ呪文」

「え？」

「だから助けてくれたのは、何かの霊なの」

どんな霊がいったい助けてくれたのだろう。

あの明るい光。

すべて包み込むような、温かい光だった。

たぶん霊に好かれているのは、萌葱だけではないのだと、芳春はふと思った。

家につき、玄関を開けると、出てきたときと変わらない土間があった。

あたたかい、住み慣れた家。

「舞姫？」

食堂からタオルをかぶった萌葱が、顔をだした。

そして、二人を見て目をまん丸に開く。

「……どうしたの、二人とも」

そう言つて、軽い足どりで二人のもとに来て、そして頭にかけていたタオルで二人の顔をおおった。

タオルは温かくしめり、ほんのりとリンスの香りがした。

そのタオルでごしごしと顔を拭かれた二匹の子豚は、やっと子供ように泣きだした。

わんわんと泣くと、萌葱が優しく抱きしめてくれた。

月夜の晩の、そんなお話。

其之五 「一生懸命」

眠っていた芳春>ヨシハル<の頭の中に流れてきた歌声は、夢の中のものではなかった。その出所を求めるように目が覚めると、しばらくぼうつとした頭は天井の薄暗いようすを浮かび上がらせることしかできなかった。やがてはつきりしてくると、その静かな歌声が窓の外から来ていることが解った。

子守歌のような、若い女の声。まだ少し眠い体をおこした芳春は、窓際まで歩いていき、網戸ごしに庭をながめると、いつものように櫺の近くにすわる更紗>サラサ<と、それに向かいあうか細い少年の姿がみえた。

とても、とても細い少年で、どこかおぼろげに光っているようにも見えた。何となく気になって、芳春はその声につられるように、そつと庭に出てみることにした。

からん……と音をたてながら下駄をはくと、芳春は裏口から庭に出た。夜の庭は静かで、風が草をさらさらと撫でる音と、みいーみいーと小さく鳴く虫の声、そして、更紗の消え入りそうな歌声だけが、庭に満ちていた。

ちよつと欠けた月と外灯にてらされた緑の芝を、芳春はしゃしやらとかき分けて歩いていく。それにつれて、あの細い少年は立ち上がり、やがて、煙のように輪郭をなくしていくと、そのまま消えていってしまった。更紗の元についたときには、もう、その痕跡すらそこには無かった。

「起こしちゃった？」

更紗は虫を驚かさないように、静かな声で語りかけてきた。

長く、少しウェーブのかかった茶褐色の毛。そして、無邪気な笑

顔。ちよつととぼけたようだが、長女でありこの家の当主でもある、いつもの更紗がそこにいた。

「やっぱり今の幽霊だったのですか」

「うん。つい最近、病気で死んじゃった男の子。たった今、成仏しちゃった」

そういえば、ちらつとだけ見えたその幽霊の横顔は、何となく嬉しそうだった。あれが、霊の成仏するときの様子だったのだ。芳春はぺたんとそのばに座り込むと、あたりを見回した。

さら、さら……さら

草がこすれあう。樹木が揺れて葉がかさなりあう。

空を見上げると、大きくて真っ白な月と、たくさんの星。

静かな、夜の庭。

「もしかして更紗さん。いつも、こんなことをしていたのですか？」

「芳春う、もしかしたら、私がいつも遅くまでただ堕眠をむさぼっている思っていたのお？」

芳春はこっくりとうなずこうとして、あわてて首を横にふった。

「この野郎お、いい度胸だ」

更紗はにじり寄ると、逃げだそうとする芳春を抱きかかえ、わき腹をくすぐった。

「あはは、更紗さん！ ごめんなさいいっ！」

「よろしい」

夜のせいか、更紗の攻撃はすぐにやんだが、静かなムードは吹き飛ばされ、いつものペースになっていた。

うう、わき腹がこそばゆい。

「どうも、勘違いしているみたいね。ちゃんと説明しておくけど、私の本業は小説家なのよ」

「え？」

「誰も認めてくれないけど、お被い屋が副業、小説家が本業。別にぐうたらしたくって、副業の請求額をこんなに高くしたわけじゃないのよ。本業をしっかりやりたいから、依頼数を少なくしたかった

だけ」

「そつ、そうなんですか」

「あ、疑っているな」

更紗がまたわき腹をくすぐる用意をしたので、芳春は思わず必死に首を横にふった。

「いいわよ、どうせ副業の方が収入が大きいから、そう思われるのよ」

「どんな本を書かれているのですか？」

最近、話を横にそらすのが上手くなってきたなあ、と芳春は心のなかで呟いた。

「幽霊の人の話。こうして座っていると、成仏できない人がいろいろ話しかけてきてくれるのだけれど、それを小説化しているの」

「……………」

「生きている人に聞いて欲しい、いろいろなことを私に訴えに来るの。全国から。それをまとめて小説にしているのだけど……………あまり売れないのよあ」

「どつ、どうして売れないのですか？」

「解っているんだけど、文才がないのよ、わたし。夢になって、本は出しているけどね」

ちよつとだけ伸びをして、更紗は立ち上がり、ジーンズについた土や草を軽くはらう。

「芳春ちゃん、お腹すいちゃった。一緒に食べにいこ」

「こんな夜中にですか？」

「私にとってはこれから夕食なの」

昼食が朝食になっているのだから、なるほど一食ずつずれているらしい。辞退するかを考える間もなく更紗にせかされ、芳春はけつきよく一緒について行くことになってしまった。

寝巻を着替え、芳春は更紗の待つ車庫に向かった。車庫には大きな車とバイクがそれぞれ一台ずつ、置かれていた。エンジンがかっているのはバイクの方だった。

「…………まさか、バイクでいくのですか」

「もちろん、バイクでいくのよ。はい、ヘルメット」

一抹の不安。それでも、大きめのヘルメットをかぶると、更紗にひよいと持ち上げられて、タンDEMシートに乗せられた。二人乗りのステップはあるものの、ぎりぎり足がつく程度で心もとない。たんつと更紗が前に座ると、赤ちゃんをおぶうときのようなベルトがまわされ、いちおうは固定された。

グローブをはめ、ゴーグルをつけると、軽くアクセルを回す。ぶおんと、軽快な音と振動が伝わる。

「じゃあ、いくよ」

ぎゅつと更紗の体をつかむと、それを合図にして黒い機体はゆっくりと動きだした。

芳春にとつて、24時間レストランにつくまでは、必死に更紗に抱きつくことと、信号の度に深呼吸することぐらいしかできなかった。15分ほど走ったのか、気づいてみればバイクはレストランからの明かりに照らされた、思いのほかこみあつた駐車場についていた。

ライトが消え、ふおんと言う音のあとバイクはもとの静けさを取り戻した。ふたたび抱きかかえられてシートから降りると、やっとヘルメットを取ることができた。

「ぶはっ」

「ご苦労さま。ちょっと恐かった？」

優しい姉のように、笑いながら更紗が聞いてきた。どうもこの人は、からかうことで相手に愛情をあらわす人のようなうだ、と芳春はため息とともに考えた。だから、憎むことができない。

はたから見れば親子のような二人組は、明るい店内に入っている。中はこんな時間だと言うのに賑わい、夜の喧噪を作り出していた。更紗と芳春は、ウェイトレスの後について、4人用の窓際の席

についた。

芳春はジュースとケーキを、更紗はツナサラダとハンバーグのセツトを頼むと、やっとひと心地ついて、二人はどちらからともなくため息をつく。

外を見ると、ときおり通る車のランプが広い国道に流れている。それでも動いているものはそれぐらいで、すべての店はきつちりと閉まりきり、闇の中にとけこんでいるようだった。そして少し遠くにある信号だけが、黄色い点滅を繰り返している。

店内は主はカップルや、何かのグループらしき青年集団だったが、なかには中年の二人組や勉強している若者もいた。広いレストランの席は6割がた埋まっており、前後の席もそれぞれカップルと女だけの4人組が座っていた。

「いつも、ここにいらつしやるのですか？」

「私はそんな不良娘じゃないぞ。いつもはだいたい、舞姫が作りおきしておいてくれたものを食べている。まあ、ときおりはこうして外で食べているけど」

ふうんとうなずいている間に、早くもジュースとケーキ、それにツナサラダが来たので、それぞれほうばり始めた。

「しっかり説明しておくけどね、だいたいいつもあんな感じで幽霊とお話しているの。朝の夜明けとともに眠って、昼頃起きる。だいたいいつもこのパターン。そして昼間は主に本を読んだり、小説を書いたりするのが毎日の日課」

そこに宴会やら、飲み会が入るわけですね、と言いかけてやめた。最近、舞姫に似てきたかも知れないと思う芳春であった。

「昔は、この幽霊とお話するのが嫌だね。私の方が悩みを誰かにぶつきたいのに、夜中になるといろんな幽霊が私のところに来て、訴えてくるの。それで、ちよつとぐれちゃった」

そう言つて更紗は笑ったが、芳春は笑うことはできなかった。

更紗は、小さな時から跡継ぎとしての教育はされてはいた。それでも、普通の人間であることにかわりのない更紗は、恋や友情、学

業などに悩んでいた。それなのに、夜になると容赦なく幽霊があらわれ、呪いの言葉、悲しみの言葉、後悔の言葉、辛い言葉をはきかけてくる。布団をかぶっても、枕で耳をおおっても聞こえてくる声から逃れることができない毎日がすぎれば、ちよつとぐらいぐれても誰も文句は言わないだろう。

辛かった、逃げたかった。すべての業から逃れたいと思ったが、やがてその苦しみを素直に受けとめられるようになった時、更紗は後をついだのだった。

言葉の裏に含まれたそんな一生懸命の奮闘は、雰囲気だけしか芳春には通じなかっただろうけど、そのうち解ってくれるかも知れないな……と、更紗は考えていた。

芳春は解ってかどうか、ふうん……と呟いてふと外を見た。

ぱらん、ぱっぱっぱっ

数台のバイクと単車が、窓の外を通り過ぎていく。暴走族とか、最近では「ローリング族」などと呼ばれる集団は、かなりけたたましい音をたてていた。

「やあねえ」

「うるさいわよね」

その声は更紗の裏に座っていた、女4人組から聞こえてきていた。少々派手な女子大生か、OLと思わせる集団だった。その声を聞いて、ほんの少しだけ更紗の顔から笑いが消え、静かに水をこくりと飲むと外を見つめた。

「あの人は確かに、他人に迷惑をかけているけど、その事実を知っている。他人に迷惑をかけていないと思って、人を傷つけていることに気づかない人と、それほどかわりはなんてないと思う」

後ろの人に聞こえているかどうか解らないが、明らかにその人達に対しての言葉のようだった。

「あの人はああするのが普通だったり、楽しかったり、ほかのこ

とから逃げたかったりしてやっているのだけれど、そういう風にはとれないものかなあ」

更紗はかつて、暴走族との交流もあった。それで知ったのは、相手もやっぱりごく普通の少年少女達でしかないということだった。別にかわいそうでもなければ、恐そうでもない、いきがっているけど、ほとんどは優しい。

確かに迷惑はかけている。でも、誰もが人に迷惑をかけている存在だということを知り、そして、遠くに存在するように見える彼らのことも、やはり同じなのだと思う人が一人でもないものなのだろうか、と更紗は思うのである。

知性とはすなわち、相手のことを思う想像力と、先を読む思考力のことでないのだろうか。

「心との戦いにぬくぬく育った人達よりは、よっぽど一生懸命に生きてるんだけどね」

暴走族は、しばらくしてふたたびガラスの前を通り過ぎていった。その時、更紗が大きく手を振ると、向こうからも手を振りかえってきてくれた。店内はちよつとびっくりしたように、更紗のもとに視線が集中した。

「知り合いでもいらしたのですか？」

「いないよ」

「じゃあ何で」

更紗はにっこり笑った。

「やってもらうと、嬉しいのよ」

バイク乗りは、旅先でよく他のバイク乗りにピースサインをおくって、挨拶を交わす。それはけっして礼儀ではなく、お互い共感して交わしあうもので、その一瞬だけ孤独から解放され、すっかり嬉しくなる。

更紗の行動はそんなところらしいが、芳春にはまだ少し理解し難かった。

やがて外はもとの静けさを取り戻し、店内も喧噪を取り戻した。

ただし、4人の女組の声だけは静かになっていた。

更紗に賛同して声をひそめた子。恐いと思った子。言い分に怒った子。

いろいろいるのだと思う。

でも、いろいろな人の気持ちを考えて欲しい。

いま人が増え、情報が増え、横にいる人のことを考える暇がなくなってきたから。

更紗はそのことが言いたくて、小説家になったのだから。

お腹も満足して、二人は帰路についた。

バイクが走り出してもさつきほどは恐くなく、芳春はあたりを見回すぐらいはできるようになった。そうなると、灰色のアスファルトがすごい勢いで流れていくのが見えた。そして、外灯がひとつ、またひとつと遙かうしろへと通り過ぎていく。

「更紗さあーん！」

一回目は更紗にとどかなかったが、二回目の呼びかけには気づいてくれた。

「なに？」

速度が少し落ちて、風の音が優しくなった。

「今日の男の子はなにを、伝えに来たのですか！」

「えっ、なに？ あ幽霊のこと？」

「そうです！」

「あの子はね、筋ジストロフィーで指一本動かすことのできない子だったんだって！ それで両親に、看護婦さんに、医者に迷惑をかけるばかりの存在だから、早く死にたいってそればかり考えていたんだって！」

バイクは町並みを抜け、山あいのワインディングロードへと移っていた。他に車もなく、バイクもなく、優しくなった風の流れに身をまかせながら、カーブをゆるやかに抜けていく。

ぶろろ、と一定の振動も気にならず、いつしか空を飛んでいるような気持ちになってきた。林がすごいいきおいで抜けていくのに、星はいつまでも目の前に光っている。そして、ほんの少し、更紗から柔らかな石鹸のような匂いがした。

「だけれども、指一本動かせないから自殺することができない。それで考えたすえ、食べることを拒否したんだって。点滴とかで栄養は補給されるけど、体はみるみる衰弱していつて、本当にそのまま死んでいくはずだったらしいの」

カーブを曲がると、そこからはずっと下りの道となった。そして、光の粒が眼下に広がった。自分の住んでいる街。自分の育った街の、あたたかい家の光。長くゆるやかになった下り道が、ずっとその街へ吸い込まれるように、長く、太く、続いていた。

「ある日、いつものように必死にスープをお母さんが飲ませようとしていたのを、ただ固く口も目も閉じて反抗していたんだって。でもとうとう、お母さんがこらえきれずに泣き出してしまったの」

静かに、子守歌のように更紗の声が流れゆく。ただもう眠たくて意識だけはつきりしているのに、夢の中にいるようだった。

光が不思議なほど柔らかく、アスファルトを照らしている。きれいな、きれいな路面。

「その涙がぼたりと顔に落ちたときに、もうこれ以上お母さんを苦しめることはできない、そう思っ、一口だけスープを飲んだんだって。そうしたら、お母さんが、そんな大声のあげたことのない人なのに『看護婦さあーん！ この子が、この子が飲んでくれたの！』って叫んで、みんな喜んでくれたんだって。その時にね、何の役にもたたない自分でも、生きているだけで周りの人が喜んでくれるんだ、無駄な人間ではないんだって、気づいたんだって。それを他の人にも伝えたくて、私のところに来たの」

世の中に何の役にもたたず、むしろ迷惑ばかりかけている人間でさえ、無駄な人ではないのだと言うことを、伝えたい。

かわっている人がいるのなら、生きて。

頑張つて。その時がくるまで。

一生懸命生きていれば、きっといつか何かを得ることができるのだから。

家についたとき、芳春は眠りについていてた。

夢を見るような、安らかな寝顔で。

すべてのことを、その小さな胸にひめながら。

更紗は微笑み、二人を縛っていたロープをほどくと、芳春を優しく抱きかかえた。

月夜の晩の、そんなお話。

其之六 「三人の少年と合宿」

八月の終わり。みんないんから、つくつくほうしへと、蝉の鳴き声も季節の変化を告げていた頃、神無月家のお屋敷はいつになく騒がしかった。大きな家の中ごろにある道場で合気道の合宿が開かれるため、参加する子供とその両親が庭に集まっていたからである。

その合宿に参加する人数は十五人とそれほどの規模ではなかったが、小学生から高校生まで幅広い年齢の男女が入り交じり、仲の良い兄弟姉妹が集まったような賑わいをみせていた。ある者は自分一人で元気に訪れ、まだ幼い子は両親に連れられてくる。大きな庭はいつになく人で溢れていた。

一人旅行かクラブなどの合宿で、だいたいの子供は初めて親と離れる経験をする。親から引き離された子供は、大方ものすごい不安や寂しさにさいなまれるのだが、そこで見る世界は今までとはまったく違っていて、やがて親から離れた自分というものに慣れてくる。子供は「自立」という言葉を、そうして体で憶えはじめるようである。

小学二年生の「康助>コウスケ<」という男の子は、おかつぱの頭とぶつくらとした容姿をしていて、まだ幼稚園のような幼さを全体的に残していた。ちよつと気の弱い子供で、別れようとする両親の姿を見て、泣き出しそうなくらい顔をゆがませ、眉間にしわをよせていた。

「康助、じゃあ私達は帰るからね。頑張るのよ」

そう言い残して、両親はいつそ潔いほどそのまま帰ってしまうと、康助はすっかり泣く機会を失ってしまったが、相変わらず寂しさを必死に耐えているような表情をしていた。やがて、あきらめたがついたのか、とぼとぼと道場に向かって歩いていった。

やはり同じ小学二年生の「翼>ツバサ<」という男の子は、反対

に元気一杯で、親と離れられることがいかにも嬉しそうに笑っていた。親はちよつと心配そうな表情をしていたが、子供に説得されてそのまま家へ帰って行った。

「やつと行った。せいせいした」

と言うと、少年は道場に向かって走って行った。

二人は同じ小学2年生の、はじめて親から離れた子供達だった。

一般の小学生の参考にはならないが、神無月家三姉妹の末妹「舞姫」マイヒメ<」はその頃、食事の用意でおおわらわしていた。もっとも、手ではなくもっぱら口が動かすのに苦労をしていたのだが、合宿参加者15人＋先生1人＋扶養家族3人。合計19人分の食料を作らなくてはいけなくて、台所には手伝ってくれる母親や近所の奥さんがひしめき合っていた。その中央でいつもの黒い脚立の上に立ち、

「あつ、村上くんのお母さん。魚のはらわたお願いしまあす！ 木村さんのお母さんは、パセリの方を！」

という調子で、気を許すと井戸端会議をはじめてしまうお母さん達を、必死にとりまとめている。メガホンでも欲しいものだわ、と舞姫は心の中だけで呟いた。

「舞姫ちゃん、えらいわねえ。料理から洗濯までこなしちゃって。うちの子にもすこし見習わせたいわ」

「でも、いつかは憶えることですから、急がなくてもいいんじゃないですか？ 今は他のことを吸収する時期だと思いますし」

「そうね。でも、舞姫ちゃん、成績もいいいでしょ？」

「でも、可愛げがありません」

みんないつせいに笑った。

「なに言ってるの。こんなに可愛いのに。本当に私の子と交換したいくらいだわ」

舞姫は微笑みでこたえ、そしてそつとため息をついた。自分はそ

んな良い子ではないと思っっている舞姫は、褒められると何となく疲れてしまう。それに、それでもやっぱり自分の子が一番なのだろうし。

いくつかそんなたわいもない話を交わしていたが、その中でひとつだけ舞姫の心に残る話があった。普段から無口なとある母親が、ふと舞姫に変わった質問をしてきた。

「舞姫ちゃん、御両親は元気？」

「はい。元気ですけど」

「相変わらず仲がいい？」

「うつとうしいくらい」

「そう、いいわね」

その母親はそういつてまた黙ってしまった。

「何かあったんですか？」

話すことが気が向かないようで、しばらくは何もいわなかった。

「……あのね。高坂さんのところ、とうとう別居したの。妹が嫁いでいるから、心配で」

それきり、また黙ってしまった。

親の方は知らないが、その一人息子はこの合宿にも参加していて、舞姫も良く知っていた。昔から暗くて落ちついた雰囲気の子（といっても、舞姫よりはずっと年長なのだが）だったのだが、最近はまたとくに暗さに磨きがかかってきたなあ、と思っていたところだった。

それでも、合宿にはしっかりと参加しているし、今もきつといつものように練習をしているだろう。

子供でも悩みありね……と、舞姫はふと道場の方をながめた。

合気道の先生は、「甲斐武人>カイ タケヒト<」という60をこえる老人ではあるが、いまだ髪も黒々としていて、それらしい雰囲気は微塵も見られない。いつでも真剣な表情と優しい笑顔しか見

せぬこの先生は、小さな子供からも好かれている。隣街に住んでいるため、普段は週に一回しか教えることができない。そこでこうして、夏の休みを利用して毎年合宿が行われるようになったのだった。練習という割には過酷さはなく、一人一人に丁寧に教えてくれるだけである。それでも子供達ははしゃぐこともなく、この時間だけは真剣に先生のいうことに耳を傾け、いわれるように一生懸命からだを動かしていた。

ただそれでも、「ご苦労さま、今日はこれまで」、という先生の静かな言葉が、相変わらずいちばん好きなのだが。

練習が終わり、わぁ、と歓声が上がリ順番に着替えたり、お風呂にはいつていたりする。道場はすぐに夕食の用意がならべられ、外は夕方を迎えようとしていた。年の幼いものから、親にいたるまでみな均等に働いて、夕食はすぐにとのつた。

「高坂健士>コウサカ タケシ<」はその時、ぐうぜん神無月家に居候している芳春>ヨシハル<の隣に座った。

「久しぶり。本当にここにお世話になってるんだね」

健士に話しかけられ、芳春はちよつと恥ずかしそうに笑い、うなずいた。

二人は遠縁の親戚の間柄で、ふだんは無口な健士も芳春は話のしやすい相手だった。どうも芳春とは精神的な波長が似ているようで、ぜんぜん緊張しないせいだと健士は思っている。

「萌葱さんとか、舞姫ちゃんとか。みんないい人ばかりだからね。

居心地がいいだろう」

「うん」

「いいなあ」

二人の間はそう多くの言葉が必要とせず、それだけの会話だけで十分満足してしまった二人は、目の前にある夕食を食べることに専念することにした。ただ時折、健士はその箸の動きを止め、ぼおつとしている時があった。芳春もそのことに気がついたが、とくに聞き出すことはしないことにした。

「芳春、ちよつと二人で話をしたいんだけど」

食べ終わり、芳春が食器を片づけて部屋に帰ろうとしたとき、思いきつて健士は芳春に声をかけた。芳春は一度首をかしげたが、すぐににっこり微笑んで「いいよ」と答えた。

「ついてきて」、芳春にいわれて連れていかれたのは、2階からさらに梯子を上ったところ、つまり屋根の上だった。そこだけ平らになっていて、芳春は体育座りをして、健士はあぐらをかいて並んで座った。

平らな部分はそんな広くなくて、ちよつとおつこちそうな気がして、健士は下の方をちらつとながめた。庭の芝がすこし遠くに見えるけど、そんなに恐さは感じなかった。それよりも、あたりの景色のほうが目についた。

ちよつと目の前には海が広がっていて、かなり黒くなった海面が広がっていた。海は真つ黒なわけではないのに、もしかしたら月が入ったらすべて飲み込んでしまふかな、と思えるような深い色合いをしていた。

あたりはもうだいぶ夜になり、まだ幾分青さを残した空にはてんと星が瞬きはじめていた。いつとう明るい星はたぶん水星で、太陽がそのかけらを落としていったみたいに、見上げたあたりで光りかがやいていた。

下からは、みんなの声が聞こえてくる。ちよつと道場の真上にあたるらしいが、こちらの声は聞こえないはずだ。ちゃんと芳春は気を使ってくれていた。

「どうぞ」

「うん、いいところだね」

「悩んだらここに来るといい、って更紗さんに教わったんだ」
「なるほどね」

健士は話し始めようと思ったが、しばらく黙って目の前にある空と海をながめることにした。こんな光景はしばらく見ていなかったし、そしてこれからも見れるかどうかは解らない。当たり前すぎる

光景は、気にしないと見落としてしまうものだから。

心が落ちついて、気持ちの整理がついて、そして健士は語りだした。

「親が別居したんだ。とうとう」

「うん」

「仲が悪いのは昔からだっただけ、別居するほどとは思っていなかった」

「うん」

「どうすることもできないのは知っているけど、辛くて誰かに聞いて欲しかったんだ」

二人の間に沈黙がおりた。でも、緊張感はなく、こうした沈黙がどちらかと言えば心地よいものでさえあった。この頃になると、海風もちよつとは涼しくて、二人の間を通り抜けるのが気持ちよかった。そして、とにかく誰かに聞いてもらえた解放感から、健士はいくぶん気持ちがすっきりするのを感じていた。

別に芳春に相談もちかけたわけではないことは、二人とも了解していた。芳春はそれほどの人生をまだ経ていないのだからしょうがない。ただこうして、信頼できる人に聞いてもらいたかったただけなのだ。

友人でもなく、親でもなく、先生でもなく。信頼する、血のつながりのある誰か。家族の秘密を打ち明けるのに、芳春は一番いい相手だった。そして、本当に少し楽になり、健士はそれで満足だった。「親が両方そろっているというのも、大変だね」

芳春がふと、呟いた。健士はその言葉を聞いて、芳春の母親は彼を産んですぐ亡くなった事実を今更おもいだし、そして、自分がすべての不幸を背負っているような気持ちになっていたことを、少しだけ恥じた。

「後免。母親がいるだけ、まだ僕の方がましかも知れないね」

「そんなことないと思う。だって、僕はいま幸せだから」

「そう」

「うん」

「……有り難う、話ができて良かった」

健士は本当にそう思った。

二人の横顔に、やがて月のひかりが投げかけられ始めていた。

毎年、合宿の恒例行事は、夜中におこなわれる怪談大会と花火大会だった。今年も寝る用意のできた子供達は、円を作り明かりを消して、怪談大会を始めていた。

べつに強制はしていないので、怪談が怖い人達は違う部屋で別の話で盛り上がるのだが、つい見栄をはって怪談の方に顔を出してしまった人の中には、年長のお兄さんお姉さんと一緒にひとつの布団にくるまなければ眠れなくなってしまう子もでてる。

今年も、何人かの女の子が舞姫の部屋へいって盛り上がっている様子だったが、怪談の方もいつにない盛り上がりを見せていた。

「ある高校でおきた話なんだけど、漫画を描いている人がね、夜中まで部屋に残っていたんだ。どうしても原稿を描きあげなくちゃいけないらしくて、やむなく泊まったのだけれど、その部屋はかならず幽霊がでるって有名だったんだ」

中学3年生、普段はどちらかといえば静かな少年だが、こと幽霊に関しては右にでるものはないと言われていて、この怪談大会にはもはや欠かせない存在になっていた。彼の話は話し方も間合いもよく、けっこう怖い。

寝巻きになって円をつくる女の子の中には、枕をぎゅっと抱きしめる姿や、となりの子の服を離さない子も見られた。

「その幽霊と言うのが毎回決まっていて、首のない幽霊がドアを叩くんだって」

女の子が、ひっ、と言って横の子の肩に目をふせた。

「その昔、ものすごく絵の上手い人がいて、等身大の人物像を描い

てこの部室に残していったんだけど、何代目かの人がある顔が気に入って、顔の部分だけ切りとって家に持ち帰ってしまったらしいんだ。その幽霊は、その顔をもとめて、部室にさまよいでるようになっていたって」

少年の口はよりいっそう、静かに真剣味をましていった。

「それでその子は、描きあげたらすぐに家に帰ろうと思っていただけ、ついつい遅くなってしまって、気づいたら夜中の2時になっていたんだ。『あつ、もうあの幽霊のどる頃だ』と思ったとき、ドアがドンドンと叩かれた。もし部員や用務員のおじさんだったら、そのまますぐに入ってくる。幽霊がきたってすぐに解った。それで無視し続けたんだけど、ドアの音がどんどん大きくなっていく。開けて入ってくればいいのに、ドアの叩く音だけがどんどん大きくなっていく。ドンドンッ！ドンドンッ！……って。しばらくは耐えていたんだけど、ドアの音はもう耳を必死に閉じていても耐えられないほど大きくなっていったんだ。出口は一つしかない。もうその子は逃げ出したくなって、とうとう自分でがらってドアを開けた。……そして、そこに立っていたのは、首の断面がきれいに見える幽霊だった」

一人二人、泣き出してしまった。

翼でさえだいたいぶ元気をなくしていたが、逆に康助はいくぶん平気そうだった。

健士は隣の同じクラスの女の子に抱きつかれた。女の子はすぐに気を取り戻して、「あつ、後免」と顔を赤くして離れる。健士が「大丈夫？」と訪ねると、その女の子はさらに顔を真っ赤にしてぶんぶん顔の縦に振った。健士にはその反応がどんな意味を持っているかは解らず、すぐに元のように顔を戻した。

ちなみに、芳春と萌葱はいたって慣れた様子であった。このぐらいは、日常茶飯事とでもいいたげである。

「その子はもうたまらなく恐くなって、その幽霊を押し退けるようにして外に飛び出して、死にものぐるいで家に帰った。そして、二

度と泊まる人はいなくなっただって」

一時間ほども続いた怪談大会もこの話でお開きとなり、年長組は幼い人達を便所に連れていき、わいわいと騒ぎながらも道場でみんな眠る用意を始めた。

「康助くん、一緒に眠らない？」

たぶんこの子は一人では眠れないだろうと思った、合宿参加メンバーでは年長組になる萌葱>モエギ<は、自分から声をかけた。こういう子は、まだ自分からは誘うことができないはずだから。

康助はちらつと萌葱を見て、少し考えるように下を向き、やがて首を横に振った。やっぱり恥ずかしいらしい。

「うん、解った。じゃあ、一つだけいいこと教えたい。眠れないときは、無理に眠ろうとしないこと。その方があとでよく眠れるの。お休みね……」

こくと康助はうなずくと、萌葱は微笑んで、代わりに別の女の子に声をかけにいった。その女の子は恥ずかしそうにうなずいて、二人は一緒に布団で寝ることになった。

そして、闇が訪れた。

2時間後、やはり康助は眠れなかった。

どうも布団の居心地が悪くて、落ちつかない。でも、怪談のせいではないようだった。自分でも意外なのだが。

今ではもう、ぱつちりと目を開けてしまっていて、しばらくは眠れそうになかった。萌葱の「無理に眠ろうとしないこと」という言葉を頭の中で反復すると、康助はむくりと体をおこした。

庭に面するカベは障子になっていて、月明かりがその白い紙をとおして道場の布団の群れを照らし出していた。布団はぴくりと動きもせず、青や赤の色彩をいろどっている。障子の方に目をやると、白いスクリーンとなった障子には、庭の木々のこまやかな葉の様子が揺れながら映し出されていた。

だれ一人おきていない。自分一人しか意識がない。でも、それはあまり寂しいものではなかった。耳をすませば、庭からかすかな虫の鳴き声も聞こえてくる。

ちーい、ちーい……りりりり……

「……なんだ、やっぱりお前も起きていたのか」

横で寝ていたはずの翼が声をかけてきた。彼も眠れなかったらしい。翼の場合は、あの怪談の話が頭のなかから離れてくれなくて、どうしても眠れなかったのだが、恥ずかしくてそんなことは言えなかった。ただ二人して、外を見つめた。

「ちよつと、外にでようか」

「うん」

そのまま寝てもしかばらく寝つけないだろうと思い、翼はせつくだから外にでて涼もうと考えた。他の人を起こさぬように布団の間をそおつとすり抜け、障子までたどりつくとき自らその障子を音をたてぬように開けた。

そして、閉めた。

「どうしたの？」

不審に思った康助がそうたずねたのだが、振り返った翼の顔はかなり深刻なものだった。眉をよせ、泣き出してしまふのを必死にこらえているような表情だった。

「ゆつ……ゆう霊……」

「えつ、幽霊？」

康助はいたっておとぼけた様子で聞き返すと、障子をあけ外を見渡した。そして櫺の下に、更紗>サラサくと幽霊らしきぼんやりとした光をみた。しかし、それほど恐くはなかった。むしろ、翼が恐がっている様子をみて、少しだけ勇気がでて、「更紗さんがいる。行ってみよう」と言い出した。この神無月家の長女である更紗は、霊能力が非常に長けた人物であることはふたりともよく知っていた。

それでも、翼には恐いようで、「やだっ！ 恐い！」と体一杯に拒絶をしめす。

「じゃあ、僕一人で行ってくる」

康助は戸惑いもせず、外にでて行ってしまった。翼はそのままじっとしていたが、一人でいる方がもつと恐いことに気づくと、康助のあとを追って飛び出していった。

庭にでると虫の鳴き声が、よりいっそう大きくなる。そして、風が吹いていた。芝生がゆらゆらと揺れるなか、二人は寄り添うように更紗のもとへ近付いていく。

更紗がすぐにこの幼い冒険者達に気がつき、手招きして呼び寄せる。二人は霊を避けるように遠回りして、更紗の近くへよっていった。

「そんなに恐がらなくてもいいから。近くにいらっしやい」

そう言われても、近寄れるものではなかった。

「この幽霊、見える？」

かなり奇妙な質問に、二人はこくんとうなずいた。

「どんなふうにな？」

「ぼんやりと光ってしか……」

「かつ、顔が見える！」

「やっぱり見え方が違うのね」

更紗がうなずくと、その光はすうっとかき消す雲のように輪郭をなくしてゆき、そしてなくなってしまった。二人の少年はぼうぜんとして、その一部始終をぽっかり口をあけたまま見つめていた。

「いつちやったの？」

康助の声は落ちついていった。横にいた翼は、小刻みに体がふるえているようで、合宿に参加するときとはすっかり逆の立場になっていた。

「うん、成仏しちゃった」

「じょうぶっ」

「神様のところへ帰っていった、ということ」

康助はこくんとうなずいた。真剣な眼差し。更紗はふふつと笑うと、その細い指をゆっくり空に向かってあげていった。その指先を追うように顔をあげていくと、漆黒の闇に広がる星たちが視界一杯に映し出された。

ざわっ……！ ざわっ……！

広い庭を、二度ほど大きな風が駆け抜ける。そして少年たちをとりまき、去っていった。木々がまるで笑うかのように、さざめく。寂しいような、きれいなような、二人はじんつとする不思議な気持ちに包まれて、恐さはもうどこかへいつてしまっていた。

小さい頃というのは、どうしたものか辛いと思っても、辛い、とそれだけで終わってしまう。もっともつと大きくなると、「もう、やめてやる」とか、「今までで一番つらい」とか、他の気持ち心がにわいてきて、実際よりももっともつと辛くなってしまう。

「辛い」ことに対して本能的に「辛い」と思う以外の、余分な知恵がその時にはなかったためらしい。知恵というものは、生きていくうえに非常に大切なものではあるが、先入観をもたせる余分な側面も持っているのだと知ったのは、ずいぶんあとになってのことである。

そんなわけで、次の日、少年少女達は無邪気に午前中の練習に励んでいた。親の別居の辛さも忘れ、怪談の恐さも忘れ、親と離れている寂しさも忘れて、ただもう一生懸命に相手に向き合っていた。

もともと合気道というのは、「盾」と「矛」でいえば「盾」にあたる武術で、防御の術なのである。そしてさらに「気」の概念や、人間の構造の概念を取り込むことによって、小さな力で大きな力を受け流すことができる武術になっている。だからこそ、女、子供に

も有効な数少ない武術として、世間にも受けとめられているのである。

朝の練習が終わると、昼食になり、そしてその後は昼寝の時間になる。小さいときに何よりも大切なのは、睡眠だとよくいわれる。何しろ、起きている間は頭も体もめいっぱい動かしまくっているのだから、休む時間だつてたくさんいる。夏の昼過ぎは暑いが、風通しのよいすだれのかかった道場は、過ごしやすい程度にすずやかで、みんなは心地よい眠りをしばらくとった。

そして、午後の練習、夕食。その日も鳥の鳴き声とともに終わろうとしていた。

夕食をかたずけた後、萌葱はひとりの女の子に声をかけられた。

「なに？」

「ちよつと相談にのつてほしいんです」

中学2年生の、ちよつと大人っぽい顔立ちをした綺麗な女の子だった。昨日、怪談大会の時に健士に抱きついてしまった子で、あの時のように顔を少し赤くしていた。

萌葱の部屋へいき、二人つきりになっても彼女はしばらく何も言わず、ただ座り込んでいた。

「健士くんのこと？」

萌葱が単刀直入に口にとると、彼女はびっくりしたように顔をあげ、そしてこっくりとうなずいた。

学校にいるとき、健士は他人という存在でしかなかったのに、一緒に合気道をやり始めてから、いつも一生懸命で、格好よくて、何となく一人でたえている健士にひかれる自分に気がついた。

そして昨日、彼が横に座っているだけで心臓が信じられないくらいドキドキして、抱きついてしまっただけからはもう、彼の顔も見られなくなっている。

「どうしたらいいのかな……」

萌葱は優しい笑顔で、この恋する女の子に近付いた。

「これから、二度と顔も合わせないでいることはできる？」

女の子はまたびつくりしたような顔をして、そしてぶんぶんと顔を横にふった。

「ずっと、仲のよい友達でいられる？」

ちよつとだけ考えて、やっぱり首を横にふった。

「じゃあ、告白する？」

これにも、激しく首を横にふった。

「友達でいるのが、この中ではいちばん楽みたいね。でも、いつかは自分の思いを知ってほしい」

女の子は真剣な瞳で、じつと萌葱を見つめた。

「好きという気持ちって、凄いいね。大きくて、溢れてきそう」

女の子はこっくりとうなずいた。

「だから友達でいれば、きっとその溢れる思いは言葉や態度にのって伝わるはず。その時に相手をしっかり見つめて、相手の気持ちと自分の気持ちを考えて、自分が後悔しないようにね」

女の子は少しだけ微笑んで、またうなずいた。萌葱はつられて微笑んで、くしゃくしゃと女の子の髪をかきあげた。

「友達になるのには、ちよつと勇気が必要だけど、できる？」

「頑張ってみる。有り難う、萌葱さん」

うん、と静かにうなずいた。

二人が降りていくと、もう庭では花火大会が始まっていた。外は夕暮れすぎ、薄紫の色に染め上がり、その中で花火だけが明るく光りかがやいていた。

縁側でたたずむ人は西瓜>スイカくをほうばり、種を一生懸命とっている。女の子達だけで輪をかこみ、小さな花火の火をつけるところもあれば、年長の男が大きな花火に火をつけ、大空に光の花をあげていた。

その光に浴衣姿の子供達や、草木や、家がうかびあがる。子供達の顔はどれも、花火を一心に見つめる笑顔ばかり。子供の中には、その花火をふりまわして闇のキャンバスに絵を描く子もいたり、いっぺんにいくつもの花火に火をつけてみせる子もいた。

健士は小学生たちにせかされて、花火の先に火をつけていた。

「ほら、いつてらっしゃい」

萌葱に背をつつかれて、女の子はゆっくりと健士の近くによっていった。花火をとり、火をつけてもらい、二人でじっとその花火を見つめていた。

一人、二人と小学生が離れていき、そしていつのまにか健士と女の子は二人つきりになっていた。ずうっと、ずうっと二人きりで、じっと静かに花火を見つめていた。ときおり、本当ときおり言葉を交わして、また花火を見つめる。それだけなのに、二人はずっと離れずに、二人でいた。

一人で完全な人はいないのだから、二人で少しでも補いあってほしい。一人で完全ならば、一人で生きていけばいいのだから。健士は親の別居による気持ち、相手に少し持つてもらえばいいし、女の子の重すぎる「好き」という気持ちを、相手に少しあずかってもらえばいい。そして、お互い気持ちを軽くして、一人でいるより二人であることが自然であればいい。

そうして二人は、ずっとずっと花火を見つめていた。そして、たくさん、たくさんの煙が空に舞い上がり、雲にけぶる月が咳をしないかと、二人はちよっと心配をしたのだった。

次の日、朝の練習が終わると、短い合宿は終わりを告げた。

親が迎えにきて、誰もが懐かしさと寂しさのために、親に抱きついていた。

翼はなかなか親がこないで、やきもきしていた。やっと現れた母親に抱きつくと、むしろ親の方がすっかり当惑している様子だった。そして、泣きださんばかりの息子の頭を優しく撫でてやっていった。ほんの少し、親の愛する気持ちが解ってくれたみたいで、親はホッとしているようだった。

康助は、やがてやってきた父母をみると、駆け寄っていったが抱きつきはしなかった。そして「すごく楽しかった」というのだった。父と母はお互いに顔を見合わせ、少し大人になった息子にちよつと嬉しさと、そして寂しさを味わっている様子だった。

寂しさを強く乗り越えてくれたことは、親にとって嬉しいことだった。でも、それはどんどん離れていく息子を見ることで、親の方が寂しくなって息子の頭をそつと撫でた。

「寂しさ」と「愛する」気持ちを、どうしたらいいかを知ることによって、少しずつ大人になっていくような気がする。

あの時の気持ちはだんだんと別のものになつていくけれども、あの大きさと、純粹さを、今になつても忘れることができない。寂しさに泣いた、あの夜のことを。

月夜の晩の、そんなお話。

其之七 「かみなり、じろろ」

夏も終わりがけ、最近は雨が降ることが多くなってきた。季節の変わり目はひと雨ひと雨ごとに何となく肌寒くて、だんだんと秋が近付いてくるのを感じやすい。そんなときの雨は、だいたいしとしと静かにふるか、今日みたいに雷を伴う大雨のことが多いようだ。

どん がら がら

太鼓のような音が空にひびく。そして、どんどん暗くなる空から大粒の雨が降り始めた。外にいた人が逃げる間もなくびしょぬれになるほど、すごい勢いで雨粒が増えていき、いつしかあたりは雨一色になっていた。

家の縁下でたたずんでいた更紗>サラサ<と芳春>ヨシハル<はいきなり降りだした雨にびっくりした。暗い雲が立ちこめたかと思うやの、すさまじい雨である。

ざつ ざあ ざああ

目のまえには桜が3本、緑のいろを濃くした葉が雨粒をいつしんに浴びていた。葉にたまった雨粒が、ぽとぽとと下にはえる苔に落ち、そして土にしみこんでいく。

「すごい雨ですね」

もうすぐ10才になる芳春が呟く。いつもより大きな声で言っただけなのに、雨の音にすぐにかき消されてしまった。

「静かでもいいわね」

22才の更紗は、吹いてきた風に髪をなびかせ、落ちついた口調

で呟く。そんなに大きな声ではなかったが、きれいな声ははつきりと芳春の耳にとどいた。

しかし、静かとはとも言えない。雨の音、雷の音で、声を張り上げなくてはいけないというのに、と感じた芳春は聞き返さずにはいられなかった。

「静かですか？」

「自然の音以外、なにもしないじゃない」

芳春はくりりとあたりの音を聞きわたす。

家の中には他に人はいなくて、物音一つしていない。車の音も、人の足音も、話し声も、虫の声さえも聞こえない。雷雨のやかましさ慣れてくると、芳春はあまりにも静かな気がしてぶるっと身震いした。

更紗は、涼しげなワンピースの裾と、少し色の落ちた茶褐色の髪とを風になびかせながら、ちよつと笑みさえ浮かべ空を見つめていた。

こんな時、更紗がとても落ちついているのを見ると、芳春は本当に落ちつくことができる。昔、まだこの家に居候していなかったとき、芳春はたいがい大きな家で一人しかいなくて、雷の時は恐さのあまり、布団の中で泣き続けていた日があった。

たった一人の存在がこれほど安心感を与えるのかな、と芳春はちらりと横の更紗を見た。

「あつ、落ちた」

「えっ」

どおおん おん！ と地響きにも似た音が体を揺らすと、芳春は胸がきゅうといたくなってしまった。やっぱり怖い。そうだというのに、更紗はすっかり嬉しそうに、

「ねえねえ、何かうきうきしない？」

という。芳春はつい、大きな声で「しませんっ！」とこたえた。手をぎゅっと握る芳春を見て、更紗はちよつと笑い、そして迷惑なことに、芳春をからかいたい気分にかられたようだった。

「昔ねえ、芳春君ぐらいの年頃の子供達が遠足に出かけたの。そうしたら急に曇りだして、雷になってしまつて、先生達は急いでみんなに金属をとるように指示したんだつて。その時ある子がね、『せんせいっ！ これも取るんですか！』つて自分のバツジを高々と持ち上げたの」

更紗はそう言いながら、自分の手をあげた。芳春は気が気でなくて、大きな瞳を潤ませていた。雷がもうすぐそこまで来ている。

「そうしたら、その手をあげた子に、どっかああん！！」

ひととき大きな雷が、すぐ近くのビルの避雷針に落ちた。芳春はあまりの音に耳に手をあて、つぶつた瞳からは涙がこぼれ落ちた。本当に恐かつたらしい。

いつまでも、おんおん、と雷の名残音がこだましている。そして、あたりの景色はいっそう灰色の世界につつまれ、水を含んだ土の香りがあたり一面に広がっていた。

雨はもう、滝のように流れ落ちている。バケツで水を落としたつて、こうはなるまい。

更紗はきゆうに芳春がかわいそうになつた。まさか本当に泣いてしまふとは思つていなかった。

「ごめんっ！ そんなに恐かつた？」

「少し……」

「ごめんね。ちょっと、からかいたかつただけなんだけど」

更紗は、両手で芳春を抱きしめた。ふわつとした雲の中に飛び込んだような、芳春は気持ち良かった。

「安心して、落ちた場所から70メートル以内は、もう安全なんだつて。それに、電気の通りやすさに関係なく、高い場所にあるものに落ちる性質があるから、この家は大丈夫だし。あとね、あとね」

「……更紗さん、もう大丈夫です」

「そう？」

自分から離れた芳春の顔は、真っ赤に染まっていた。甘い香と柔らかな肌を抱きしめられていることが、ひどく恥ずかしいことのよ

うに芳春は思えたらしい。

母親に抱きしめられたことがないのに、もう恥ずかしい年なのかな、と更紗はちよつと残念に思い、芳春の頭をくしゃくしゃと撫でた。

少し、雷の落ちた光と音の差がひろまってきた。もう雷は通り過ぎていったようで、雨もゆるやかになりつつあった。

「ほら、向こう側、もう晴れてきてるよ」

芳春はそちらの方向を見て、言葉もなくうなずいた。雨雲の端がしだいによってくるのが見える。

「……………」

上空には、すごい風が吹いているようだ。雲の群れが来たときと同じように、あつという間に流されていく。そして見えたのは、太陽からの眩しい光りと、きり雨だった。

「にわか雨になった」

「『にわか雨』は、正しい表現じゃないなあ」

「どうしてですか？」

「『にわか雨』は『にわかに降り出して、すぐに止んでしまう雨』のことであつて、『晴れているのに雨が降っている天気』のことを厳密には、さすわけじゃないから」

「じゃあ、どうやっていうのですか？」

更紗の得意げに笑った横顔に、さあつと陽光がさした。眩しいほどの肌の色に、芳春はちよつとだけ目を細めなければならなかった。

「狐の嫁入り」

「きつねのよめいり？」

「そう」

二人はふたたび雨ふる晴れた空を見つめた。

その遙かとおく、かすかに見える山の中で、あのすました顔をした狐達が結婚衣装を身にまとい、幸せな行列をくんでいる様子を思い浮かべると、芳春はさっきまでの気持ちが雲といっしょに流れさり、何となく嬉しい気持ちになった。

狐の花嫁の笑顔に、この晴れた空とかすかに降る雨が、ものすごく似合っているような気がするのだった。

山奥のふかい緑のあぜ道を歩く、狐の嫁入り。

更紗にもう一度だきしめられ、自分の母もそうしてお嫁にいったのだろうか、などということ芳春は思い出していた。

晴れた空の下、そんなお話。

其之八 「大切に」

芳春へ

今日は芳春に憶えておいて欲しいことを思いだしたので、その話をしたいと思う。話の内容はだいぶ難しいだろうし、解らない漢字も多いと思うが、それがわかる年になってから読んでもらえばいいとも思っているので、気にせずに書かせてもらう。

そして、この手紙をどう受け取るかは、全て芳春に任せたいとも思っている。破り捨ててもいいし、忘れてしまってもいい。ある意味で、これから伝えようと思っていることは父親のエゴであるから、一切の強要をするつもりがないのだ。全ては芳春の好きなようにして欲しい。

君が生まれたときのことだ。

君が今まさに生まれようとしている時、私は仕事をしていた。私は、仕事をしている最中はそのこと以外に頭が働かない方なので、実のところ君が生まれそうだと連絡を受けるまで、まったくそのことを忘れていた。だが、連絡を受け仕事を早々に終わらせてからは、今度は君と妻の安否で頭が一杯になっていたことを憶えている。

君が生まれたのは隣街の赤十字病院で、駅の比較的近くにある大きな病院だった。私はすぐさま電車で飛び乗り、その病院へと急いだ。

その時の気持ちを何といったらいいのか解らない。
期待といったらいいのか、不安といったらいいのか。

だいぶ昔の話になるが、私にはもう一人の弟が生まれるはずだった。

君の祖母がもう40を過ぎた頃のことだ。

やはりあの時も同じように連絡を受けて、病院へ兄とともにかけつけた。父（君にとってはお祖父さんか）は私達よりも早く病院につき、すでに扉の前の椅子に座り込んでいた。

兄に連れられた私はその父の様子をみて、ただならぬことが起きていることがすぐに解った。

かなり遅い時期のお産は胎児にも母体にもよくない。もしもの可能性が高い、と話には聞いていたが、その言葉の意味が解らなかった。だが、父の姿をみて初めて体で理解した。

こんなに父は小さかったのだろうか。

こんなに非力そうだったのだろうか。

そして、私達が見ていることに気づきもせず、父は椅子から降りて正座をすると、ぴつたりと額を床につけ祈り始めた。

その真剣な様子に心臓をつかまれたような思いがして、兄と私はただその場に立ちつくした。

お産を見た経験は後にも先にもそれっきりだったので、私はお前がちゃんと生まれてくるのだろうか、とても心配だった。

駅を降りると、不思議なほど足が早くなっていた。病院は歩いて5分ぐらいのところにあつて、急いでも急がなくてもそれほど変わりのない所にあるのだが、だからこそ走らずにはいられなかった。

革靴というのは走るのには向かないものだということを、あの時はあらためて思い知らされた。走り込むたびに靴が外れそうになつてしまうのだ。風に流されてあちこちに移動するネクタイを何はともあれ後ろに流し、私はけっこう一生懸命走った。

そんな私を、道ばたを歩く若い人達が、不思議なものを見るような目をしてみつめているのだ。息がきれ、体も汗ばむほどに動かし

ていたが、頭だけは妙に冷えていてその時の様子を何かの絵を見つめるように憶えている。

病院にかけこみ、入ったすぐの所にある受付で場所をたずね、廊下だけは走らずに分娩室へ向かった。

お産はまだ終わっていないようで、部屋の外で私は待たされた。だが早産ではなかったことに私は妙にほっとした。早産は流産につながる印象がやはり、根強く私にはあつたらしい。

そして、椅子に腰掛け、私は君が生まれてくるのを待つことにした。

あの時の気持ちというのは面白いものだ。心は妙に冷静なのだ。というか、大したことはあまり考えられない。くだらないことが浮かんでは消え、そしてどちらかというとても冷静なのだ。

ただ、足は貧乏ゆすりしているし、煙草を吸おうとして、分娩室の前だと思つてやはりやめにして、そんなことを限りなく繰り返していた。自分でも落ちついているのか、いないのか、とても解らなかった。

そして、子供を持つというのは、どういう意味なのかと考えだした。

君が生まれるということとは、まだ私にとっては、他人が家族の一員となるのとあまりかわりのないものだった。少しショックかも知れないが、血のつながりというものが、あまり私には実感ができなかったのだ。ただ、なるべく自由に、私のように束縛されないように育てることができれば、とだけはその頃から強く考えていた。

しばらくはそんなことを取り留めもなく考えていたのだが、君はなかなか産まれてこなかった。私はしだいに焦り始めていたが、その一方で、いやお産とはこのぐらい時間がかかるものではないのかとも考えていた。

だが、それは全くの無知だった。

私がそうして扉一枚外で考えているとき、お前と妻は必死に戦っていた。

あとで医者に聞いた話によると、もともとお前はなんら問題なく出産されるはずだったのだという。体つきもけっして大きくはないし、妻も帝王切開しなければいけないほど華奢というわけではなかった。

だが、なかなか産まれてこない。

医者は特に問題はない、少し時間がかかっているだけだと思っていたらしいのだが、予想をはるかにこえ、お前は産まれてくる気配すらなかった。

これ以上は危険だと察知した医者は、すぐに帝王切開に切り替えるよう看護婦に言いわたしたその瞬間、お前の母の様態が急変した。母体を助けるための処置と、帝王切開が同時に行われた。

その慌ただしい様子は私にも知れたが、私は単純にももうすぐ産まれるためなのだと、納得していた。妻が生死の瀬戸際にいたというのに。

母の様態は、生命を司っていた糸が緊張の連続に耐えられず切れてしまったように、急速に死へと向かっていた。痙攣が始まる、全身にチアノーゼが起こり始める。転げ落ちる命を止めることは、誰にもできなかった。

奇しくも、お前が産まれたのと母の命が絶えたのは、同じ時だったという。お前が母体の中からすくい上げられ、へその緒が切れ、泣き始めたその瞬間、母の心臓は停止した。

やっと聞こえたお前の声に、私はなんとも言えない感慨を覚えていた。

大きく、高く、響きわたる声。

何かを作りだしたような、何かから解放されたような気持ち、叫び声。

やがて、君は保育器のガラスの中に入れられた姿のまま、私の前にあらわれた。

看護婦の真剣な眼差しなど気づきもせず、私は真っ赤な顔をした君を見た。

嬉しい。

心から、嬉しいと思った。

だが、そんな思いを無視して、保育器は去っていつてしまい、代わりに待っていたのは、気まずそうな表情をした医者だった。

その時の気持ち、君は解ってくれるだろうか。

衝撃というのはね、どうやら、大きすぎるとなかなかやって来ないものらしい。

ひどく冷静で、頭の中は海の底に広がる世界よりも、もっと静かだった。

その頭が、医者からの言葉を静かに受けとめていく。

説明が終わり静かになったとき、私は扉の向こうへ歩きだした。

とびらを向こうは、違う世界だった。

母はね、真っ白だった。

雪のように真っ白で、君が出てきたところだけ少し赤かった。

看護婦の人にすぐに押し出され、もと座っていた椅子にすべてを任せて寄りかかるしかなかった。

でもね、相変わらず頭は冷静だったのだよ。

何も頭の中に浮かなくて、ただ何故こんなに冷静でいられるのかと、さらに深く落ち込んでいたのだ。

1時間ほど何も考えずに座り込んでいると、看護婦がベッドを用意したから少し休むといい、と優しく声をかけてくれたのをきっかけに、私はやっと歩き出した。

どこを歩いたのかは、未だにはっきりと覚えていない。

ひどく冷静なくせに、何も考えられない。出口がどこにあるのか解らないのだ。

ふと気づくと、横のガラスの向こうに、君と同じような保育器の中に入った新生児達の姿が見えて、私はそのガラスに顔をつけた。

君には悪いが、君が保育器とともに去ってからこの時に至るまで、

私は君のことをすっかり忘れていた。

だがガラスに顔をつけたとたん、みんな顔は同じように見えるのに、君がどれなのか何故か解った。

そして、見つめていたら、涙が溢れたきた。

ただもう溢れてきて、一生分の涙が流れるかと思った。

君が産まれるというのは、こういうことだったのだ。

ぼやける視界の向こうで、私はひたすら君だけを見つめ続けたのを憶えている。

私は生きなくてはならない。

柔らかな君の命を守るために、私は生きなくてはならない。

そして、君のために生きること、ほんの少しの義務と、なぜか誇りを感じる。

だから、生き続けて欲しい。

こんな手紙に縛られてはいけませんが、だが父と母の君への気持ち、できることなら忘れないで欲しい。

君を、掛け替えのないものとは言わない。

何よりも大事なものとも言わない。

君は産まれたその時から、私達の所有物ではなく、ひとりの人間となったのだから。

父は君と友達になりたいと思っている。

いちばん長い時を過ごすことによつて、他の誰にも共有できないものをもつ友達になりたいと思っている。

だから、君はいつでもひとりの人間として、沢山の人と接して生きて欲しい。

そして、全ての人を大切に。

自分を、大切に。

月夜話、番外編 「秋の夜長に」

十月の初めにしてはいくぶん寒い夜のこと。芳春の部屋に置かれた炬燵はもうすでに電気がつけられていた。

芳春にあてがわれている部屋は、とても広い。さらにすきま風もあつて、部屋の中はだいぶ寒かった。

更紗のお古の半纏を着て、炬燵に足をつっこむ。万全の体勢をととのえて、芳春は眠たくなるまでの時間を勉強にあてていた。

夜の十時過ぎ――この頃になるとあたりはもの凄く静かになっていて、鉛筆の力り力りする音だけが聞こえてくる。

秋の夜だけはきつとほかの季節よりも長いのじゃないかな、そう思ってしまうのはこんな瞬間である。

そして、こんな静かな時にはたいてい、更紗が邪魔をしに来るのだった。

「炬燵に入れさせてえ！」

ノックと同時に扉が開き、パジャマ姿の更紗が飛び込んできた。芳春の向かい側を陣取ったかと思うと、体まで炬燵にもぐりこむ。

「ううん、ゴロゴロ」

芳春が、「ねえこおは炬燵でまあるくなるうう」という言葉を思いだしていると、ぴよっこりと更紗の顔があらわれた。

「芳春君、なにしてるの？」

「あつ……寝るまでのあいだ、勉強をしようかと思って」

「勉強？ 健康的じゃないなあ」

「芳春はおもわず苦笑した。」

「じゃあ、何が健康的なんですか？」

「誰かの家に遊びに行ったり、ファミコンしたり、漫画読んだり、舞姫と恋を語ったり」

ちようどその時、舞姫が大きな盆を持ってあらわれた。その盆の

上には、二組の紅茶がほのかな湯気をあげていた。

「誰が恋を語るって」

「あら、舞姫ちゃん。聞いてたの？」

「聞こえただけよ。余計なことと言わないの」

「照れちゃってっ！」

更紗がぼんつと舞姫の肩をたたく。いつもなら舞姫が反撃に転じるのだが、今日は静かだった。そつと、芳春の前に紅茶をおくと、ほのかな甘い香りが漂った。

「あつ、いつもすみません。言っていただければ、僕も手伝うのに」
「いいのよ、私にとつての気晴らしだから」

舞姫はそう言つて、もう一つの紅茶を自分のもとに置き、盆を机からおろした。

そして、一瞬の沈黙。

「……私のは？」

更紗の問に、舞姫は冷たく一瞥する。

「働かざるもの食うべからず、よ」

「働いて食わしているのは私じゃん？」

「学生は勉強が仕事。しかるに更紗はいま何をしているの？」

「うつ……」

芳春も二人の問答には慣れてきて、くすくすと笑いながら、口をつけた紅茶をそつと更紗の前に置いた。

「更紗さん、良かったら少しどうぞ。美味しいですよ」

「優しさが心にしみる。少しだけいただくわ」

舞姫が作ってくれた紅茶は、ダージリンのミルクティー。しかも水をいっさい使っていない牛乳だけでこしたものだつた。

普段ならちよつとくどいかも知れない紅茶も、こんな寒い夜にはちよつどいい甘さと濃さになっていた。

「インド風ミルクティーよ。頭を使うと、お腹がへるからね」

ちよつどその時、ドアがノックされた。

かちやりとドアが開くと、萌葱がひよつこりと顔を出した。短い

髪の下で瞳が優しく笑っている。

何かと芳春が思うと、ドアの影から電話が出てきた。

「芳春くん、お父様からお電話」

萌葱はそう言う中に入ってきて、そつと芳春の耳元に受話器をあててくれた。

しばらく聞いていなかった父の声と、二こと三こと交わすうちに、萌葱は炬燵に入りこんでいた。

三人の瞳が見つめる暖かな視線と雰囲気につつまれながら、芳春は嬉しそうに電話口にもかって語りかけていた。

舞姫が電話の邪魔をしないように、自分の紅茶をそつと萌葱に渡すと、萌葱はにっこりと微笑んで口をつけた。

電話が切れる。あたりは夜らしい静寂を取り戻したが、前よりはずつと温かかった。

「お父さん、何だつて？」

「今度の授業参観。遅れるかも知れないけど、必ず来るそうです」

「良かったね」

「はい」

四人はお互いに顔を見合わせて、微笑んだ。

部屋もだんだんと暖かくなり、萌葱は換気のために少し窓を開けた。

その隙間から冷たい空気が入りこんでくる。

胸を冷たくする空気は、吸い込むと意外にも甘い温かな香りがした。

金木犀の香り。

紅茶の香りと重なって、それは不思議な温かな匂いとなってあたりを漂い始めていた。

その空気を胸にいっぱい吸い込んだとき、ふと更紗が呟いた。

「そつえば、芳春君が来てもう三ヶ月もたつのね」

「そうですね。本当にお世話になってばかりです」

芳春はあらためてまわりを見渡す。

「舞姫さんには、いつも食事を作ってもらって有り難うございます」
「どういたしまして」

舞姫は、可愛らしく首をちょこつと曲げておじぎした。

「萌葱さんには武道の相手をしてもらって、だんだん力がついてきました」

萌葱は、それはそれは嬉しそうに微笑んだ。

「ねえねえ、私は？」

更紗の言葉に開いた芳春の口は、何かを言おうとしたまま止まった。

しばらくの静寂が続き、そして舞姫と萌葱が腹をかかえて笑いだした。

「いいんだ。どうせ私なんか、単なる邪魔者だもんね」

「そつ、そんなことはありません。ただ、どういったらいいのか解らなくって」

誰よりも感謝をしているのに、芳春にはどうしても言葉が見つからなくて、更紗をなぐさめるしかなかった。

そのとき舞姫は、更紗がいてくれたおかげで寂しくはなかったのよ、と芳春の言いたかった言葉を正確に把握していた。

舞姫の両親が引越してしまったとき、更紗の邪魔なほどのちょっかいがどれほど寂しさを紛らわしたか。

そして、芳春が父から離れて暮らすことになっても、それほど遠方にくれることがなかったのも、やはり更紗がいてくれたからなのだろうな、と舞姫は思っているのだった。

とは言っても、舞姫は口に出して更紗を褒めようとは、まったく思っていなかった。

そうして、舞姫と萌葱は笑い、芳春はすねてしまった更紗をなぐさめ続けるのであった。

空には満ちた月。

金木犀には橙色の花。

月からの冷たい光を一身に浴び、

金木犀はいつまでもほのかな香りを漂わせていた。

月夜の晩の、そんなお話。

其之拾 「深くなるもの」

帰りの最終電車に飛び乗った更紗は、席に座るなり安心して眠りについてしまい、駅員に揺り動かされて目が覚めたそこは終点であった。

「やつてもおーた……」

まだ少し酒気が残るため息をつき、更紗は落ち込んだ。ここから家のある駅までは四つほど離れており、タクシーで二千円ほど、歩いて二時間ぐらいはかかるうか。両方とも以前ためす機会があったので、数字は確かである。

更紗はようやく二十三才という若さだが、それには似つかわしくない「御被い」という職業を生業としていた。祖母からその地位をゆずられて早三年。実力はある方だと自他ともに認めている。

今回も比較的大きな仕事をこなしてきた帰り、関係者と「すこし」呑んできたのがいけなかった。ほんのビール二本に、日本酒三合、ブランデーをロックで瓶半分ですましてきたのだが、心地よい眠りにつくには十分な量だった。

「また舞姫に怒られる……」

何か失敗すると、末の妹の顔を思い出す。小学生ながら家事全般を引き受けてくれている頑張りやなのだが、その代わり母のように厳しい。

だいぶアルコールの抜けた頭をふり、まずは辺りを見渡した。起こしてくれた駅員さんの後ろ姿が見える。そして自分にもたれ掛かって眠る大学生らしき女の人。その他には蛍光灯の光があたりに満ちているだけだった。

そういえば、彼女とずっともたれあいながら眠っていたような気がする。黒色のワンピースを着ていて、どうやら更紗よりもずっと呑んできたらしく起きだす気配がなかった。

「ちょっと、ちょっと。終点だよ」

その子の頬をぺちぺちと叩きながら更紗は声をかけたが、まったく応答がみられない。急性アルコール中毒かも知れない、と心配になった更紗はもう一度頬を叩いた。

「うつ……ん」

かすかに眉をしかめたのを見届け、更紗は安心した。

「よかった」

彼女の肩をかつぎ更紗は電車を出た。酔った人間の体はなぜかとても重い。渾身の力を振り絞って彼女をどうにか近くのベンチに座らせ、自分もその横に座った。

ぶしゅーっと空気の抜ける音とともにドアがしまり、重そうな電車がゆっくりと動き出す。それにつられて夜風が、ベンチに座る二人の横を流れていった。電車が通り過ぎ辺りを見渡せば、電気がついているのはこのホームだけで、のぼりの向かいホームはすでに真っ暗になっていた。人もほとんど見あたらない。改札口近くに足下のおぼつかない人間が見えるぐらいで、広いホームにはただの二人っきりだった。

更紗はこうなりやいつ帰っても同じだと腹を決め、隣の彼女の世話をすることにした。月のきれいな夜は、外にいた方が楽しいのだから。

横の彼女を振り返ってみると、いつのまにか目を開いていた。視点はまだ定まらず、遠くを見つめるように周りを確かめていた。

「目が覚めた？」

視線が更紗の方を向き目が合うと、彼女は首を傾げた。

「……どなた？」

「終点まで、お互いの肩を貸しあった仲」

「ああ、横にいた人。ご免なさい、迷惑かけてしまって。放っておいて下さってもよかったのに」

「困っている人を放っておけない妹がいるもんで」

更紗は、心優しい次女の萌葱の顔を思い出した。けっして怒った

り指図したりはしないが、萌葱なら放っておかないと思うと、更紗もついそれに従ってしまう。

「でも、本当に。単なる酔っぱらいですから」

彼女はまた目を閉じた。

「それにしては、けっこう口調ははつきりしているわね」

彼女はそのまま動かなかった。顔を少し上げ、月明かりに照らされた唇が乾いているのが見える。もしかしたら、泣きたいのかも知れない。悲しさを紛らわせるために深酒をしたような、そんな表情をしていた。

「友達が……乳ガンで亡くなってしまったんです。つい最近」

それだけいって、口を閉じる。

しばらく沈黙したあと、小さな声で「こんなの酔っぱらいの戯言ですよ。ご免なさい」とつぶやく。

「よかつたら続けて」

更紗の声は少しだけあたりに響いた。あたりにはもう誰もいなくとも静かになり、ただ闇夜の月だけが二人の話に耳を傾けていた。更紗の言葉に戸惑う彼女は、喉元まででかかった言葉をなかなか吐き出せなかった。更紗が暇に任せて待っていると、彼女はようやく語りだしてくれた。

「彼女とは小学校からの幼なじみで、何度も喧嘩したけど誰よりも仲がよかったんです。お互いに好きな人ができて、彼よりもお互いをとっちゃうほど。葉子っていうんだけど、私は誰よりも彼女が大好きで……両親よりも彼よりも、誰よりも」

そこまで言って彼女はくすつと笑い、「へんな意味はなく」とつけ加えた。

背中の方の道路で車が一台、音を立ててすぎていく。それがなくなる、また静寂だけが残った。

「葉子が死んで悲しくて、泣いて、飲んで、泣いて。……何日かたって気づいた……私もいつかは彼女のことを、ほとんど思い出さなくなるのだろう、って」

更紗は穏やかに彼女の顔を見つめる。唇がわずかにふるえ、閉じた目から涙がひとすじこぼれた。

「好きでも、悲しくても、つらくても、いつか忘れてしまおうかと思うと、彼女に悪くて辛いんです」

声がかすれ、ふるえている。

彼女はこうして、ずっと泣いていたのだろう。

友達が亡くなってから、ずっと。

顔を伏せ、すこししゃくりあげながら彼女は泣いた。

その柔らかな髪をなでながら、更紗はつぶやいた。

「その人のことは忘れる。だんだん思い出さなくなるし、もしかしたら、いたのかさえもはつきりしなくなる日が来るかも知れない」
人間の脳はそうできている。

「人が死ぬっていうのは、引越して音信不通になるのとあまり変わるもんじゃなくて、やっぱり忘れてしまうのだと、私は思うよ。だからそのことで悲しまなくていい」

なでていた頭が少し持ち上がって、赤く腫らした目が更紗を見つめる。

「ただある日、ふと思い出して気づくから。忘れてしまったはずのその人に対する思いだけは、今よりもずっと深くなっていることに」
真剣に見つめてくる瞳を、更紗は見つめ返した。

「……」

「愛はね、深くなる」

更紗はほほえみ、彼女の涙を少し拭う。

「一週間も泣き続けていたんだね。右肩にいる友達、もういかないといけないみたいよ」

「えっ？」

右を振り返る。

「……友達って」

彼女には見えなかった。

ホームの蛍光灯がすべて消えた。

あたり一面に暗闇が広がったその中で、彼女の右肩がほんのり光っていた。

「……ようこ？」

「もうこれ以上いると成仏できなくなっちゃう。彼女、親のところにも彼のところにも行かず、ぎりぎりまであなたと一緒にいたのね」
振り返り、穏やかな光を見つめる見開いた瞳に、涙がいつぱいに溢れこぼれた。

「……よっ……う……」

ふるえ、のどにつかえ、言葉にならない。

そして、光は揺らめいたかと思うと、ろうそくの火のようにかき消えた。

彼女は、それでもいつまでも涙のこぼれる瞳で、見つめ続けている。

更紗はそつと彼女を抱きしめると、うつうつと声を出して泣き始めた。

ホームの暗闇のベンチでふたり、ずっと抱きしめあった。

月夜の晩の、そんなお話。

其之拾巻 「白い花」

11月も終わり、寒さがだいぶ身にしみいるようになってきた夜道を、塾からの帰途にある慎也は早足で駆け抜けていた。

放課後にクラブに精を出し、そのまま塾に直行している慎也の帰りは、だいたいいつも8時をまわる頃になる。クラブと塾の間に買い食いしておいたお腹ももう我慢の限界に達し、先ほどからやかましいほどの音をたてていた。

角を曲がり、ようやく見えたわが家に慎也は一目散にかけ込み、そのまま一気に台所まで上がり込んだ。

「ただいまぁ。かあちゃん、めしっ！」

慎也の叫びに反して、使い古された台所に母の姿はなく、代わりに姉の香緒が食卓についていた。

「慎也、もう少し静かに入ってきな」

怒るでもなく、ただ煩わしげに香緒が呟いた。

OLをしている香緒の帰りは、だいたい遅い。いつもは慎也の方が早く家につき夕食に手をつけていたのに、すでに香緒の前に置かれた皿は半分ほど片づいていた。

「姉貴、早いじゃん」

「まあ、たまにはね」

慎也は唐揚げをつまみ食った。口一杯に広がる温かな感触を楽しみながら、さつさとご飯をよそい、味噌汁を用意して、香緒の前の席に着いた。

そしてふと、不自然に机に置かれた鉢を見つけた。両手ほど大きさに敷き詰められた土には、丈の低い白い花がいっぱい咲いていた。

「どうしたの、その花。男からの貢ぎ物？」

「その通り。ねえ、あんたの部屋に置いてくれない？」

「やだよ、姉貴がもらったもんなんだろう？　姉貴が管理しろよ」

「別に水をやってくれってるわけじゃないのよ。ほら私の部屋、余地がないじゃない」

洋服と化粧品と本が散乱した部屋の様子を思い出し、慎也は深くうなずいた。あんな部屋にこんな鉢をおいたら、次の日にでも蹴倒しているに違いない。

「だから、ベランダに置いて欲しいのよ」

「えー？」

「何か困るの？」

「いやっ、まあ、それやあ困るわけじゃないけどさ」

「ならいいじゃない。水はいいから。外の木だつて水をやらなくても無事にそだつてんだから」

そうはいつても、男からの貢ぎ物をベランダに置くのは何となく気がひける。

「捨てればいいじゃないか」

慎也などはそう思うのだが、香緒は困ったように箸をくわえたまま眉をよせた。

「そこまで、相手の気持ちを足蹴にできないのよ」

「……難しい関係だね」

首を傾げながら、慎也は温かいご飯を口に放り込んだ。

ベランダへ続くガラス戸を開け、慎也は片隅に鉢を置いた。コトリ、と静かな音をたて、鉢はまるで初めからそこにあったかのように落ちついた。

花は月に照らし出され、その小さな体を寄せ合わせるように揺れていた。

その花を見て、慎也はふとある女の人を思いだした。

今日の帰り道のことである。

灰色のスウェットを着た同じ年ぐらいの彼女は、静かな夜道をむ

こうの方から軽やかに走ってきた。

手足をきれいに運ぶ姿にしばらく見とれてみると、にわかに彼女は立ち止まり、道ばたの花をじっと見つめ始めた。黄色な小さな花を咲かした丈の長い草を、珍しそうに見つめたかと思うとまた走り出し、また止まって槐の樹を見上げる。

横顔が、遠目から見ても整っていた。月と外灯の光でまっしろになった顔立ちを見て、慎也の足が知らず止まったほどだった。

彼女が目を閉じ、くんくん、とわずかに香る樹の匂いをかいでいる。その度に、短く切った柔らかな髪がゆれる。

彼女はふたたび走り出し、目を離せずにいる慎也の横を、何事もなく通り過ぎていった。

ただそれだけ。

それだけだと言うのに、慎也の心の中に深い印象を残した。

というのも、

「あんな美人、見たことない」

ためだった。

学校ではそれなりにもてる慎也でさえ、彼女の姿は忘れがたかった。

いふなれば、飾りたてたアイドルの髪をばつさり切ってしまい、親しみやすさをつけ加えると、あんな感じになるのだろうか。

近所では見かけたことのない顔なのに、慎也は不思議な親近感を憶えていた。

小さな唇と、小さな鼻。

優しい瞳。

「すっげえ、かわいいよなあ」

彼女の姿を思い出し、慎也は思わず鉢を抱きしめた。

隣部屋の窓はいつのまにか開かれ、首を出していた香緒は静かな声で呟いた。

「……慎也、何やってんの」

次の日。

慎也の帰りはいつものように遅かった。

そして密かに、ふたたび彼女に会えないだろうかと心悩ませていた。なにしろ、今までと同じ道を同じ時間に歩いていたのに、会ったのは昨日がはじめてのことなのだから。

昨日出会った場所でわざわざゆっくりと歩き、あきらめて角を曲がると、そこはもう家へと続く道となる。

牛の歩みほどの速度でねばってはみたものの、家の前についてもなお彼女の姿は見えなかった。

「やっぱり、昨日みたのは偶然か」

慎也は深くため息をついた。

そうそう上手くいくわけないよなあ、と心の中で呟いて門の格子を開けるたとき、視界の隅で誰かが走っている姿を見つけた。

「！」

彼女だった。

まだ遠いくて小さく見えるが、軽やかな走り方、そしてときおり立ち止まる様子は、間違えようのないものだった。

だんだんと姿がはつきりし、家の前にある空き地で彼女は足を止めた。

そして、そこに生えていた草木を眺めわたす。

思っていたほど、背は高くない。

最初は自分よりも高いと思っていたが、それは顔が小さく、等身が違って見えることからくる錯覚だった。

ぼんやりと見つめていると、とつぜん彼女が振り返った。

目があい、彼女はにっこりと微笑んでくれた。

「こんばんわっ！」

「えっ、あつ、こっ……こんばんわ」

彼女はかるく会釈して、そのまま走り出した。
憶えていた。

一度しかすれ違ったことのない自分のことを、彼女は憶えていた。ただそれだけで、慎也の頭は真っ白になった。

「どうしたの、慎也」

食事の用意をする母親は、さきほどから放心状態にある息子に声をかけたが、箸を持ったまま返事をかえす様子もなかった。

自分の夕食にせつせと箸を運ぶ香緒は、心配する母親に的確な表現で説明した。

「ほっとしてやって。青春してんのよ、きつと」

次の日、いつもより帰りが遅くなり、足早にいつもの道を過ぎると、家の前の空き地に彼女が座っていた。

いつものように花でも見ているのかと思ったが、いっこうに立ち上がる気配がない。

どうしたのだろうか。しばらく悩み、慎也は意を決して近寄ってみることにした。

空き地の草はらを分け入る。その音に反応して彼女が振り返り、ふたたび目が合うと、昨日と同様に微笑んでくれた。ほっとした慎也は、どうにか軽い気持ちで声をかけることができた。

「どうしたの？」

「この子が……」

彼女の指さす方を見ると、そこには子犬の姿があった。

「持ち帰った方がいいか、悩んじゃって」

彼女はそういって、黒と白のブチ犬をなでた。まだ生まれて間もないような子犬は、くうんと寂しげに泣いた。

「ちよつ、ちよつと待ってる」

慎也は家へ飛び込み、台所に入ると冷蔵庫からミルクを取り出し、温めはじめた。

香緒に不審がられながら、急いで底の浅い皿にホットミルクを移しかえると、もう一度空き地へと飛び出した。

すっかり待っていてくれた彼女と子犬へ近寄り、ミルクの入った皿をそつと子犬の前におく。子犬は彼女の手を放れ、静かにミルクをなめはじめた。

「良かった」

彼女は心からほっとしたようにそう呟き、子犬を見つめた。

「本当はね、僕も犬が欲しいの」

彼女は自分のことを「僕」というらしい。一瞬、「男の子」なのかとも思ったが、すぐに否定した。近くに寄って改めて、女の子らしい体つき、顔つき、雰囲気があることを確認した。

「でも、『子供を産むのと同じぐらいの決心がついたら、引き取りなさい』って言われてるからなかなか決心がつかなくて」

子供を産むのと同じぐらい。

「それじゃあ、なかなか飼えないな」

「うん、でもその子の命を預かるんだから、やっぱりそれだけの覚悟がなくちゃね」

彼女はそういって、ミルクをなめ続ける子犬の頭を優しくなでた。子犬は少し首をすくめ、彼女の手を頬をあてるようにすり寄った。

「そうだな。前に飼っていた犬が死んだときは、さすがにもう飼いたくない、と思ったなあ」

「何犬？」

「柴犬、ごくよくいる感じで、凄く賢かった」

「うんうん」

「戦艦ヤマトが好きだったから、『ヤマト』ってつけたんだ。十二才で死んだ」

犬をなでる細い指先が止まった。

ゆっくりと顔があがり、慎也の表情をうかがうように見つめてきた。

「辛かった？」

「辛いというより、寂しかったな。あれからもう、何か飼う気にはなれなくなった」

彼女は深くうなずいて、なぐさめるように少し微笑んでくれた。

「僕の最初はね、金魚。露店ですくい上げた、大きくて真っ赤な金魚だったけど、餌のやり過ぎですぐに死んじゃった。それからしばらく、お魚が食べられなくなった」

ミルクを飲み終わり、じゃれてきた子犬を抱き上げながら、彼女は言葉を続けた。

「次はノラ犬。成犬だったけど痩せてて、食事をあげたらなついちやったの。ほとんど居候状態になって、マラソンと一緒に連れていたりして……縁の下で冷たくなっているのを見つけたときは、シヨックだった」

慎也は彼女の顔をうかがってみた。

笑いもしない、悲しみもない。死を耐えるような表情のない顔で、近くに生える草を見つめていた。

「今はなかなか一緒にいる勇気が無くて、物を大事にしているんだ」「たとえば？」

「うーんと……竹刀、長刀、胴着、パジャマ、スヌーピーのついたシャープ、雲の模様の入ったグラス。それにこのシューズとか」
彼女はそういつて、誇らしげに使い込まれた白いマラソンシューズを見せてくれた。

物は使い込めば愛着がわき、使いきれば自然と離れる決意がつく。沢山の「好き」な物たちに囲まれた生活をしている彼女の姿を思い、慎也はふと羨ましく思った。

「俺にはないなあ。考えてみると」

「何も？」

「うーん。昔は、自転車がそうだったけど、今は廃車寸前で新しいのが欲しいしな」

「部屋を見渡してみると、意外にあると思うよ。大事なものが」

彼女は犬を土の上にそつと起き、立ち上がった。

姿勢がいい。

心地よい緊張感のあるたち振る舞いなのに、なぜか包んでいる雰
囲気は温かった。

「ちよつと心配だけど。大丈夫だよ、この子」

「あつ、ああ……俺も家では飼えそうにないけど、ときどきはミル
クを持つてくるよ」

そんなまめな男ではないことは自他共に認めるところであるのに、
彼女の前では自然にそんな言葉が口から出てきた。

口に出したあととやっぱり面倒かなと後悔したが、彼女はちよつと
飛び上がって喜んで、慎也は手を握られてしまった。

「有り難うっ！ 僕、いつも違うコースを走ってるから、もうここ
を通ることなかったんだ。この先の千石寺へ行くための通り道だっ
ただけど、明日から西新井の方を走る予定だったから」

「もう、ここを通らないの？」

「街全部走り終わったら、また来るつもり。ちよつと時間かかりそ
うだけど」

彼女はそういつて笑った。

慎也は明らかに残念そうな顔をしてしまったらしい。

「あつ、でも僕、白石に住んでるし、学校も隣じゃない？ 見かけ
たら声かけてね！ 自己紹介遅れたけど、僕、神無月萌葱っていい
ます」

「神無月？」

「うん」

「……もしかして、あの美人三姉妹と噂の」

彼女はくすりつと笑い、

「美人かどうかは解らないけど、その三姉妹の次女。よく男の子に
間違えられるけど」

それほど大きくはないこの街において、神無月三姉妹の噂は一度
は聞いたことがあるものである。その中でも歳の近い次女の噂は、
隣の学校といえども伝わっている。

ようやく落ちついてきた慎也の頭は、彼女のひとことで再び真っ白になりはてた。

「あなたの名前は？」

「あつ、まつ、牧野慎也」

「牧野さん、じゃあまたねっ！　ちびちゃんのこと、宜しくっ！」

呆然と立ち尽くす慎也と、それにまわりつく子犬をあとに、彼女はあの軽やかなステップで走り去ってしまった。

「……どうしたの」

台所に帰ってきた慎也だが、心はそこに存在していなかった。香緒の言葉でようやく我を取り戻し、今度はいそいで今までの事情を説明しだした。

「ふうん。つまり、『神無月三姉妹』の一人に声をかけられたわけね」

あまり感心のない香緒は、温かなコーヒーをゆっくりとする。

それでも、あまりにも慎也が興奮しているので、儀礼的な気持ちとわずかながらの興味を持つて、香緒は質問してあげることにした。

「それで、噂どおり美人だった？」

「そりゃあもお。姉貴などとはちよっと……」

香緒の手が一閃し、机にあったハンドバックは容赦なく慎也の顔に炸裂した。

次の日の夜。同じ時間に、慎也はミルクを持って外に出た。

外は少し冷え、人肌の温かさのミルクはほんのり湯気を立てていた。

野原に足を踏み入れ、「おい。ちび」と少し探すと、木の下のもみぢに小さくくるまっているを見つけた。

ミルクの入った皿をおく。

子犬は頼りない足どりで皿まで近づくと、嬉しそうにミルクをなめ始め、安心した慎也はほっとため息をついた。

「たくさん飲めよ」

慎也は一人そう呟いた。

その時、ふと背後で足音がした。振り返ってみると、萌葱が塀の横から顔をちょこつと出していた。

「心配できちゃった」

萌葱の笑顔に、慎也の心臓は急に高鳴り始めた。

「横、行つていい？」

「そんなこと気にするなよ」

手招きをすると、萌葱は体を丸めてそそくさと、慎也の横へと入り込んできた。

子犬は一度を皿から顔を上げたが、近寄ってきたものが萌葱だと解るとまたすぐにミルクを飲み始める。子犬にとって二人は、もうすでに安心できる存在になっているらしい。

二人と子犬のあいだには、白い息のようなあたたかな空気が流れゆき、足下からくる冷氣さえも今は心地よく感じた。

言葉を交わすことなく、二人はいつまでも座り込んでいた。

次の日。

慎也は寒い台所で、みるくを温めていた。

「人肌、人肌」とミルクに指をつっこみながら、子犬の様子と萌葱を思いだす。

外に出ると、寒さはいつそうこたえる。

慎也は寒さを吹き飛ばすように、野原へ駆け出した。

草葉をかき分け、木の下にたどり着くが、そこに子犬はいなかった。

「あれ？」

吐く息が白い。ミルクからの柔らかな湯気が、顔に当たる。

ミルクの皿を下におき、慎也はあたりを探し回った。
「ちびっ」

草をかき分け、そんなに広くない野原を隅から隅まで探し回る。
でもない。

慎也は、道路に出て近くを探してまわった。

家の中を覗き、近くの他の野原を探し、公園を過ぎる。

再び戻ってきて、ミルクをなめる子犬がいなかった、かすかな期待を込めて木に近寄るが、そこには冷めてしまったミルクがあるだけだった。

慎也は、木の下に座り込んだ。

いつか、帰ってくるかも知れない。

寒かった。

静かだった。

時折、遠くで犬の鳴き声が聞こえる。

星が瞬いていた。

会社帰りの香緒が、野原にうずくまる慎也の姿を見つけ、その足を止めた。

「あんた、何してんのよ」

「俺のかってだろ」

「……風邪、うつさないでよ」

香緒はそう言って、さっさと家に入ってしまった。

知らず、慎也の顔はぶすくれた。

萌葱が来たら、何て言い訳しよう。

いや、きてくれればちょっとは気が紛れるかも知れない。

でも、子犬はどうしたのだろう。

だれかが持っていたのだろうか。

それとも、どこかに行ってしまったのだろうか。

寒さのあまり死んでしまったのだろうか。犬は死体を見られない

ようにすると言っし。

慎也は、取り留めもなくそんなことを考えていた。

ドアが開き、香緒が再び現れた。

いったい何をしにきたんだと思っていた慎也に、香緒は何もいわずスキーウェアを手渡し、家に戻っていった。

「……」

慎也はありがたくウェアに袖を通した。

三時間待つて、子犬も萌葱も来なかった。

体の底から冷え切り、慎也は家に戻った。

台所では香緒がテレビを見ていた。

慎也が席に着くと、香緒は立ち上がりコンロに火をかけた。カップを出し、少し砂糖を投げ込こんで、温まったミルクを注ぐと、そのまま慎也の前においた。

びっくりして香緒を見るが、いつものように表情もなく向かいの席に着いた。

慎也はでき立てのホットミルクをひとくち飲み込み、大きなため息をついた。

「ありがとう、美味しい」

「うん」

慎也はしばらく大事そうにホットミルクをいただき、香緒はさして興味もないようにテレビを見つめ続けていた。

冬の夜は本来、こんなに静かなものだったのだ。慎也は辺りを見渡し、聞き耳を立てて、そう実感した。

虫の音が聞こえない。

車の音もしない。

ただ、テレビの音が静かに広がっている。

ようやく落ちついてきた慎也は、その静寂を壊さぬように呟いた。
「子犬を見つけたんだ」

香緒はゆつくりと振り向く。

「ああ、ホットミルクを持っていた相手ね」

慎也はこくりとうなずいた。

「育てたいと思ったのに、そう思ったときには、もういなかった」

「……」

「きつともう会えない」

萌葱のことを言っているのか、子犬のことを言っているのか、わからなくなつて、呟いているうちにただ何となく寂しくなつた。

胸が少し痛くなつて、慎也は椅子の上でうずくまつた。

香緒はかすかに微笑んで、弟の頭を軽くなでると、そのまま自分の部屋へ帰っていった。

テレビは天気予報に代わり、明日は今年一番の冷え込みになるだろうと、告げていた。

やっと落ちついた慎也は部屋に戻つた。

外と同じ気温の部屋を暖めるために、ストーブに火をつける。

小さな火はやがて全体にまわつて、ようやく熱気と、かすかな石油の匂いを漂わせ始めた。

立ち上がり、ふと窓の外を見つめると、そこには植木があつた。

香緒がくれた植木は、こんな寒い冬に、しかも水もあげずにいたというのに、しっかりと白い花を咲かしたままだつた。

慎也はベランダの戸を開け、外に出た。

ようやく温まってきた体は、ふたたび冷氣に触れてぶるつと震えた。

腰を下ろし植木を手に取り、顔の近くまで持つてきた。

小さな白い命はふるふると震えながら、しっかりと天の星や月を眺めていた。

「部屋を見渡してみると、意外にあると思うよ。大事なものが」

萌葱の言葉がよみがえる。

大事なものは、ある、のではなく、作っていくもの、なのかも知れない。

萌葱が誇らしげに見せてくれたシューズも、自分に置き換えてみれば、クラブに使っているバスケットシューズがあるのだから。

明日学校に着いたら、ロッカーに放り込んだシューズをもう一度磨いてみよう。

いつか、萌葱に自慢して見せられるように。

これが僕の大事なシューズなのだ。

慎也は植木を脇に抱え、部屋へ戻った。

窓際の、よく陽のあたりそうな机の上に植木をおく。

「……うん、これでいい」

何もない黒い机の上に、たたずむ植木。

大事にしてみよう。

ちびに出来なかった分。

そして慎也はドアを開け、静かな部屋をそつとあとにした。

ホットミルクは飲まないけど、きつと水が欲しいだろうから。

月夜の晩の、そんなお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6927r/>

月夜話

2011年3月17日22時10分発行